

藤花薫る。

ナオ三

マンションの部屋で、吉野聡二郎とその恋人小林久美が話している。

「君との事を一週間前に妻に話した」聡二郎が言った。

「そう」久美が静かに頷く。

「昨日帰ったら妻はいなかった。彼女は出て行ってしまった」

「・・・」久美華にも言わずに聡二郎の次の言葉を待った。

「久美。ごめん。本当に申し訳ないと思っている」

久美は思っていた話の展開と違う事に戸惑う。

聡二郎は重い口調で続ける。

「昨日仕事を終えて家に帰ったんだ。彼女がいないのはいつもの事なので、自分で電気を点け、家に入った。リビングもキッチンも何一つ変わった所はなかった。僕はいつものように取り敢えず、コーヒーを入れる為に湯を沸かした。そして、着替えようと思い階段を登った。階段を登ってすぐの部屋が彼女の部屋なんだ。その部屋の扉が開け放たれていた。廊下の照明の明るさでその中が見えた。何も無かった。彼女が寝ていたベッドも、使っていたデスクも、いつも窓辺に飾られていたピエロの置物も、何も無かった。ただ、ガランとした空間がそこにあってだけだった。僕はその部屋に入る事が出来なかった。足がすくんで、ただ立ち尽くした。その何も無い部屋は、僕に想像もしていなかった衝撃を与えた。それは僕の本当の心の状態だったんだ。君には本当にすまないと思っている。どう謝れば良いのか分からない。でも、これだけはどうしようもないんだ。僕は妻を愛している。今も、多分これからも。僕には君を妻以上に愛する事が出来ない。多分、妻と同じだけ愛することすらも……。こんな僕という事は、きっと君の幸せには繋がらない。君は素晴らしい女性だ。もっと君を愛してくれる男と一緒にいるべきだと思う。子供の事は出来るだけの事はさせてもらうつもりだ。けど、君と結婚する事は、僕には出来ない。きっと君を不幸にする。僕は自分でもこんな自分勝手なエゴイストだったなんて知らなかった。普通に再婚して子供を育てて、普通に生きて行けると思ってた。愛なんて、一緒に暮らしていれば沸いて来るものだとして……。でも、それは違うって分かったんだ。僕は彼女の居なくなった部屋の前で泣いた。一晩中、声を上げて……。彼女に愛人が出来た時も、あんなに悲しくは無かった。そしてその愛人が死んで、彼女が半狂乱に成った時も、悲しくも無ければ怒りも沸かなかった。僕に、愛は必要ないんだと思っていた。妻が愛人に対して持っていたような強く激しい愛なんて、僕には理解出来ないんだと……。僕は僕一人で生きて行けるんだ。それに君と子供が加わるだけだって昨日まで自分を納得させていた。けれど、妻の居なくなった部屋は、僕に本当の心の状態を教えてくれた。そして、本当に申し訳ないんだが、その時の僕はそこから彼女を結果的に追い出してしまった君に、憎しみすら覚えてたんだ。そんな僕が君と暮らして、君や子供を幸せになんて出来るはずが無い。僕は、妻が、彼女がその部屋に戻って来る事を知っていたから、心の平穏を保っていられただけだったんだ。そこに彼女の場所が有ると言う事が、僕にとっての愛の形だったんだ。そして、それを僕は失った。彼女はもう僕の元に戻らない。それは何の罪も無い君を憎んでしまうほどの衝撃だった」

「それで吉野さんはもう一度奥さんとやり直すつもりなの？」久美は必死で自分の感情を抑えながら言った。

「いや、彼女はもう戻らない。しかし、僕が彼女を愛し続ける事は出来る。それを僕は望んでいるんだ」

「冗談じゃないわ。私は一体なんなのよ。よくもそんな事を私に言えたわね。私は今日結婚の話をしようと思っていたのよ。式の日取りだって決めたかったし、ドレスだって相談して決めようと思っていた。私の幸せをあなたはどうか考えてるのよ」久美は感情を抑え切れずに大声で怒鳴り、目の前にあった灰皿を投げつけた。

それは聡二郎の肩に当たり、灰が飛び散った。聡二郎はそれを払おうともせず、両手をついて謝った。「すまない。気の済むようにしてくれ。僕にはどうしようもないんだ」

「嫌よ。私はあなたと別れない。どうしても別れたいって言うんだったら死んでやる」

久美はそう言って立ち上がりキッチンまで小走りで行き、テーブルの上にあった果物ナイフを両手に握り締めた。

「久美！馬鹿な事をするんじゃない」聡二郎はすぐに彼女を追いかけ、彼女の持っているナイフを取り上げる。

「君が死ぬ事は無い。君は子供の命まで持って行こうって言うのか？僕が死ねば良いんだ。それなら死ぬのは一人で済む。それに僕が死んだらめぐみが泣いてくれるかも知れない」そう言って、自分の胸にそれを当てた。聡二郎は本気だった。いつもの穏やかな彼とは全く別人のように、狂気が彼を包んでいた。

「やめて。子供が出来たなんて嘘なのよ。ずっとあなたが好きだったから、嘘をついたの。子供さえ出来れば、きっと私の元へ来てくれるって思ったのよ。でも、もうあなたなんて大嫌い！あなたみたいな最低の男の血でここを汚さないで。今すぐここから出て行って！」そう大声で怒鳴りながら、そこにあるものを手当たり次第に掴んで投げつけた。

聡二郎はそのまま部屋を出た。彼女の泣き声が廊下まで聞こえた。女が自分のために大声で泣いていた。しかしそれは、自分の望んだ女では無かった。

聡二郎は振り返りもせずに、その場から離れた。

「めぐちゃん、これ、引っ越し祝い」秦浩二がピンクの百合の花束を持ってやって来た。

「ありがとう」私は微笑んで受け取り、椅子を勧める。

彼はそれに腰掛けて、コーヒーの用意をしている私の後ろ姿に向かって言った。

「自分で買うの恥ずかしいから、今朝嫁さんに買って来て貰ったんだよ。それでも、車を降りてから此処までそれを抱えて来ただけで、かなり恥ずかしかった」

私は彼の前にコーヒーを置きながら笑う。

「どうしてそんな恥ずかしい物にしたのよ？」

「前にメモリーの社長さんが『花を貰って喜ばない女性は居ない』って教えてくれたらどう？それを思い出したんだよ」

「そう言えば、春樹と前のオフィスで会ってるのよね」

その時純朴な彼は、私と春樹の間に危険なかおりを嗅ぎ取ったのだった。

「その時にあの人も、かなり恥ずかしそうに白い百合の花束を抱えてた」

「そんな事もあったわね。でも、本当に嬉しいわ。ありがとう。あいつの言った事もあながち出鱈目じゃなかったわね」

私はそれを花瓶に生け、書類棚の上に飾った。部屋が一瞬にしてゴージャスな雰囲気になった。

「喜んで貰えて良かったよ。それに良い部屋だね」

「そうでしょう？リビングだけで前と同じぐらいあるのよ。それに、キッチンも小さいけど別にあるし、ベッドルームもついてて、前とほとんど変わらない家賃よ。でも、来てもらうには少し遠くなったわね」

「大丈夫さ。どうせ車だし、こっちの方が車を止めるのも便利だ。でも、本当に急だったね」

「そうなのよ。吉野に彼女が出来て追い出されちゃったから、急いで此処を見つけて引っ越したの」

「吉野さんは此処、知ってるの？」

私が春樹を失って半狂乱になっていた時、不思議な夢を見た彼が来てくれて、吉野に連絡をし、二人で病院へ運んでくれた。

「いいえ、まだ言って無い。郵便物は転送するように届けてるからこっちに届いてるし、今のところ必要が無いから……。でも、電話も案内を頼んでるから、彼がかけようとしたらこっちの番号を知らせてくれると思うけど……。まだかかって無いて言う事は、私と話す必要は無いんじゃないかしら？仕事関係には取り敢えずFAXで流したし、明日には案内の葉書も出来上がるわ。でも、そんなのが彼の元に届いたら、彼女が気を悪くするんじゃないかって思うから、彼には送らないつもり……」

「黙って出て来ちゃった訳？」

「そんなものね。彼女と結婚したいって言う話を聞いた時に、急いで探して出て行くって言ってあったから、それで良いかなって思って。それに、引っ越し屋さんの都合とか、前のオフィスの都合とかで大急ぎだったの。あそこをすぐに借りたいて言う人が居て、本当にすごいタイミングで移れたのよ。私、みんなに追い出されてるみたいな気がしたわ。でも、かえってそれが良かったけどね」

「一人だと片付けとか大変じゃないの？」

「大丈夫よ。自分の部屋にあった物を運んだだけだから。後、日用品はオフィスに揃ってたの」

を持って来たの。食器なんかを少し買い足したぐらいかしら？でも、引っ越し費用でちょっとした出費だったから、また頑張って働かないと」

「ちゃんと離婚したの？」少し声のトーンを落として言った。

「あらっ？言ってなかったっけ？私一月にもう離婚してたのよ。彼が別にそのまま居ても良いって言うてくれたから、同棲してただけ。でも、新しい奥さんや子供と一緒に住めないじゃない。それで急いで出たのよ」

「そう、吉野さんに子供が出来たの？」少し気の毒そうにそう言った。

「そうみたいよ。でも、酷い奴よね。私なんか抱こうともしなかったくせに……。やっぱり若い女性は良いのかしらね」私は笑いながらそう言って茶化した。

「それは違うだろう？原因を作ったのはめぐちゃんだ」まじめな人柄が彼にそう言わせたのだろう。

「分かってるわよ。彼には彼の幸せがあるべきだって思うもの。新しい彼女が平気だったら、ちゃんとお祝いだってしたいぐらいよ。でも、きっと彼女は嫌だろうって思うから知らん顔してるだけ」

「そうか。でも、本当に頑張らないと。これから一人で食べないといけないんだろう？」

「ええそうよ。どうしようもなくなったらどこかに就職するわ。その時には友達の良いフリーデザイナーを紹介するから浩二君は心配しなくても良い。でも、もう暫くはこのままでやってみようと思ってるけど。だからまた、実入りの良い仕事があったら紹介してね」

「ああ、気をつけとくよ。それより、頼んでたの出来てる？」

「大丈夫。ちゃんと出来てるわよ」私はそう言って、急いで仕上げた企画書を彼の前に広げる。出雲から帰ってすぐに仕上げたのだ。

「サンキュー。助かったよ」そう言いながらそれをのぞき込む。

私は企画書の説明をする。そして必要な素材などを打ち合わせした。

それが丁度終わり、一息ついた頃、電話が鳴った。浩二君に断ってそれに出る。

「もしもし」

『五十嵐です』

「出雲ではありがとう。どうしたの？」

『どういたしまして。今夜お邪魔しても良いですか？』

「かまわないけど。何かあったの？」

『ちょっと……』

「分かった。じゃあ、食事しないで来ると良いわ。特性カレーを作っておいてあげる。前の夫が大好きだったのよ」

『期待してます。じゃあ、七時ぐらいになります』

「待ってるわ」

私はそう言って電話を切る。

「新しい恋人よ。私より一回りも年下なの」秦浩二の前に座り直し、切った電話を指さして言う。

「めぐちゃん、それは良いけど、前の夫が好きだったって言うのは良くないよ。きっと彼が傷つくと思うな」本当に生意気な男だ。

「そうかしら？じゃあ、気をつけないと」そう言って笑って見せる。

「今度は上手に恋をしなよね」

「どうもありがとう。浩二君って、兄さんみたいね」

「めぐちゃんは、仕事以外は危なっかしくて見てられないよ。仕事は安心して任せられるんだけどな」

「良いじゃない。仕事だけでも何とかまともに出来てれば」

「それはそうだけど。でも、本当に気をつけなよ」

「大丈夫。恋人って言うのは冗談よ。ちょっとした知り合いなの。一回りも年が違ったら、弟でも無いし、息子みたいなものよ。だから、仕事だけじゃなくて、良い男がいたらそっちの方も紹介してね。今度こそ玉の輿！」

「分かった分かった。じゃあ、また連絡するよ」

そう言って彼は出来上がった企画書を持って帰って行った。

私は彼を見送った後、近くのスーパーまで買い物に行き、カレーの材料を揃える。今度の場所は、一応市内だが住宅地で、仕事関係には少し不便になったがその分生活にはかなり便利になった。

お酒が飲めるようになった正巳の為に、分からないなりに美味しそうなを選んで三本のワインを買った。

部屋に戻って一番安かった赤ワインをあけ、それを少しづつ飲みながらカレーを作る。そして、最後には残った分を鍋に入れて煮込んだ。

『春樹、また何か問題が起きたの？』鍋を掻き混ぜながら心の中で春樹に問いかける。

『ああ、ちょっとな。また姉さんの出番だよ』すぐ隣に居るように彼がそう答えた。

『さっき浩二君にも言ってたように、私、一人で生きていかなきゃなんないんだから、巧く調整してよ』

『分かってるよ。でも、どうせ姉さんがやりたくなるんだから、仕方ないさ』

『困ったものね』

『それより、そのカレー、巧そうだな。俺も食べたいよ』

『変な幽霊！』

『その幽霊って、やめてくれって言っただろう？』

『分かったわよ。この前、正巳を出雲まで連れて来てくれた事、感謝してるわ。とても助かった。やっぱり一人で泣くのって辛いもの』

『そうか、それは良かった。姉さんを一人にしないって約束したからな』

『あなたが約束を守るなんてびっくりよ』

『死んだ奴は約束を破らないんだよ』

『ふーん、そんなもんなんだ』

『それより、そのカレー食わせてくれるか？』

『どっちに降りるつもり？』

『五十嵐が良いな。あいつが食べた後で、呼んでくれ』

『分かったわ。正巳にもそうっておく』

『そろそろ着いたみたいだぜ』

『あなたって本当に便利ね』

私はそう言って、濡れた手を拭き、玄関へ行ってドアのカギを開ける。それと同時にチャイム

が鳴った。

「いらっしゃい」私はそう言って扉を開けた。

「すごいタイミングですね」正巳が言って私を見た。そしてすぐに続ける。

「そう言う事ですか。梶さんが教えたんですね」

「そう言う事。さあ入って」私はそう言って彼を招き入れ、食事の用意をする。

正巳の前にカレーとサラダのお皿を並べながら言う。

「あなたが食べた後、春樹もこれを食べたいんですって」

「今日はせっかくめぐみさんとデートだったのに・・・」

「そう言うなよ。俺の女を貸してやってるだけなんだぞ」春樹が私の口を使って言う。

「誰があなたの女ですって？」私が抗議する。

「姉さんに決まってるじゃないか。姉さんは俺の女なんだ。それを五十嵐にたまに貸してやるだけ」

「そんな偉そうな事言うんだったら一人で出て来てみなさいよ。もう体も持って無いくせに」

「またケンカですか？相変わらずですね。でも、一人で言い合いするのってみっともないですよ。僕には分かるけど、普通の人だったら、自分一人で言い合って、頭が変だって思われますよ」

「本当ね。でも、結局自分で自分とケンカしてるんだけど・・・」

「まあ、そんなとこだ。五十嵐も文句言わないでそれ食ったら、体を貸してくれ」春樹が言った

。

「分かりましたよ。僕が梶さんに逆らうはず無いじゃないですか。じゃあ、いただきます」正巳はそう言って食べ始めた。

私はあわててワインを開け、彼のグラスに注ぐ。

「ごめん、先にこれを出すべきだったわ」

「大丈夫です。今からでもいただきます」そう言って彼は一気にそれを飲み、カレーを食べる。

「本当に前世治療法って凄いわね」私は、食欲旺盛な彼を見ながら、彼の空になったグラスにワインを注ぎ、ため息交じりにそう言う。

「こんなに旨いものが飲めなかったなんて、この年まですごく損してた気分ですよ」

彼はそう言って本当においしそうにまた一気にグラスを空けた。

二匹目のウワバミの出来上がりだと思った。

「めぐみさん。ウワバミって何ですか？」私の目奥をのぞき込むようにして正巳が言った。

「帰って辞書をお引きなさい。その方が良くわかるわ」

「はい、そうします」そう言ってサラダを平らげる。

「素直なところもあるのよね」私が言う。

「腹が減ってる時には、あまりものを考えないようにしてるんです」彼はそう言ってあっと言う間に綺麗に食べてしまった。

「おかわりをついで来るわ」私が言う。

「お願いします。その間に集中しておきます」椅子の背にもたれ掛かるようにして言った。

「あら、もう一杯食べてからでも良いんじゃない？」

「そんなに食べると太っちゃいますよ。最近アルコールの分カロリーが増えてるんです。僕が二杯食べて、梶さんがもし二杯も食べたりしたら・・・」正巳はそう言って笑って見せた。

私はキッチンへ行って、春樹のために新しい皿にカレーを盛り、新しいサラダを持って正巳の

前に戻る。正巳は椅子の上で力を抜いてリラックスしていた。

「春樹。どうぞ食べて」私がそんな正巳に言う。名前の呪術。

正巳の体は、まるで居眠りから目覚めたように一度伸びをした。

「あーっ。こいつも随分居心地が良くなってきた」春樹の意志だった。

「どう言う感じ？」私が尋ねる。

「酒も飲めるようになったし、こいつなりに姉さんを愛するようになってるから」

「それは有り難いわね」

「そうさ。姉さんも一緒に食べようぜ」彼はそう言って笑って見せた。

「ええ、そうするわ」私はそう答えて彼の前に座る。

春樹は私のグラスにワインを注ぎ、自分のグラスにもそれを満たした。

二人で乾杯をする。

「愛してるよ」彼が言った。

「私もよ」私が言う。

私の中の戸惑いも、随分薄れていた。

「慣れるものね」私が言う。

「ああ。これもなかなか面白い」春樹が言った。

「何か話があるんでしょう？」私はレタスをフォークで突き刺しながら言った。

「相変わらず勘が良いな」春樹がそう言って笑って見せる。

「死んだあなたが、食べたいはずないもの」

「そうでもないぜ。前にも言ったように腹は減らなくても、味わうって言う事はそれなりに楽しいものだからな。けど、今日はどうしても姉さんに話したい事があったんだ。それも、出来れば姉さんに耳で聞いてもらった方が良いと思って」

「それで、何なのよ」

「姉さんの別れた旦那の事だよ」

「吉野がどうしたの？」

「一度連絡を取ってくれないか？」

「何故、あなたが吉野の事を言うの？」

「もう一人の俺だから」

「彼はもう私とは関係ないのよ。私の中に住み着いちゃったあなたとは違う」

「それが、そうでもない。結構大変な事になってるから・・・」

「変な奴ね。彼がどうなっても、ちゃんと新しい奥さんが面倒を見てくれるでしょう？私の出る幕なんて無いはずよ」

「姉さんはもう愛して無いのか？」

「まさか？愛は相手とは関係ないわ。私は彼を愛してる。でも、彼の家庭を壊したくないの。彼は、あなたが生きてた時みたいに、器用に振る舞えるとは思えないし、彼の私への愛が続いているとも思えない」

「それがそうじゃない。やっぱり俺の和魂だった。でも、それが壊れかけてる」

「どう言う事よ。ちゃんと説明して」

「とにかく俺の口からは言いにくい。今すぐ連絡してみてください」

「それって変よ。あなたはわざわざ正巳に降りてまでそれを告げようとしたのに、何故言いにくい？」

「プライドかな？」

「死んだ男にどんなプライドがあるって言うのよ」

「とにかく早く電話してくれ」

春樹はそう言ったまま会話を拒否するように黙り込んだ。

私は仕方なく言われたように電話の側へ行く。そしてオンフックにしてダイヤルする。もし、女性の声が出たら切るつもりだった。しかし、呼び出し音が十回を越えても誰も出なかった。

「姉さん、携帯だ」春樹が言った。

私は黙って彼の携帯に電話をかける。

七度目のコールで電話が繋がった。

「吉野です」元夫の声だった。

「私、めぐみ」

「めぐみか？どうしたんだ？」

「ごめんなさい。急にあなたの声が聞きたくなかったの」私は何を言って良いのか分からないのでごまかす為にそう言った。

「そうか。僕もちょうどめぐみの声が聞きたかったところだ」

「元気にしてるの？」

「まあね。めぐみは？」

「私は元気よ。良かったら一度今度の部屋に遊びに来ない？奥さんが嫌じゃなければ一緒でも良いし」

「行っても良いの？」吉野は意外そうな声で言った。

「もちろんよ。どうして？」

「いや、めぐみは嫌だから場所を知らせて来ないんだらうって思ってたから・・・」

「まさか？奥さんが嫌な思いをするって思ったから知らせなかったのよ。それに、電話番号はこっちに案内されるように頼んであるから、用があれば連絡はつくって思ってたし」

「僕は、君が知らせてくれないから、連絡しちゃいけないんだって思ってた」

「変なの。私達別にケンカ別れした訳じゃないし、そんなに蟠る必要はないんじゃないかしら？でも、なるべく別れた妻との事は奥さんに知らせない方が良いと思うけど。だって歴然とした事実としてそこにある訳だから」

「一度会いたい」吉野が言った。

「良いわよ。いつ会える？」私は軽い気持でそう答えた。

「明日にでも」

「分かった。じゃあ、住所と電話番号を言うわね。近くまで来たら迎えに行くから電話して」

「電話番号なら知ってるよ。ちゃんと覚えた」

「そう。前のオフィスに電話したのね」

「ああ。一応はね」

「じゃあ、此処の住所教えるわね」私はそう言って住所と大体の場所を教えた。

「分かった。じゃあ明日」彼はそう言って電話を切った。

「春樹、これで良かったの？」春樹の降りた正巳の前に座り直してそう言った。

「ありがとう。間に合ったみたいだ」カレーを食べ終えた彼がワインを飲みながら言った。

「どう言う事？」私も残りのカレーを食べ終えて尋ねた。

「なんでもないさ。明日は元旦那とデートだな。でも、今夜は俺とだ」

「ちょっと待って下さいよ。僕も居ます」その言葉は正巳の意志だった。

「あれっ？正巳？あなた巧く出来るようになったの？」私は驚いてそう言った。
「そうみたいです。何か、急にしゃべりたくなっただけです」
「そうそう、その調子だ。四国での成果が出て来た」春樹が言った。
「また、ややこしくなって来たわね。やっと慣れたと思ったのに、大混線？」私はため息をつく。しかし、二人の違いは簡単に見分けられる。彼らが言うように色が違うと言うのでも無いのだが、私が違う場所で聞き分けている感じだ。
「良いじゃないか。五十嵐も一人前になりつつあるって事だ」
「正巳、どんな感じなの？」間違えないように名前を呼んでから尋ねる。
「そうですね、何か半分だけで生きてる感じですよ」
「半分って？」
「僕も良く判らないけど、普段とは確かに違う。でも、前みたいに見てるだけでも無い」
「そう。きっとそのうち慣れるわ」私は、春樹と一緒に存在する事が、初めから何ともなかったもので、その違和感は分からない。
「そう言う事だ。あのドルメンの所で、悪霊と戦ったのが良かったんだ。あれで回路が繋がった」
「そうですね。でも、僕が起きてても良いんですか？もし、何でしたら寝てますけど」
「そんなに気を使う事は無い。元々お前の体だ」春樹が笑いながら言う。
「そう言う事よ。春樹が勝手に死んじゃったのが悪いの」私が言う。
「そうですね。だったら僕は二人の間を邪魔しましょう」正巳がそう言って笑った。
「どうぞ」私も笑う。
「お前ごときに邪魔出来るかな？」春樹が意地悪そうに言った。
「確かに聞いていると面白いわね」私が笑いながら言う。
「そうでしょう？いつも梶さんとめぐみさんがやってる事ですよ」正巳が言った。
「気をつけないと・・・」
「ところで、これから何が始まるんですか？」正巳が春樹に言った。
「良い事だよ」春樹が答える。
「良い事って？」私が問う。
「俗に言う人助け」春樹が答えた。
「人助けって、誰を助けるの？」私が尋ねる。
「明日此処へ来る人だよ」
「吉野がどうしたって言うのよ。いい加減にはっきり言えば？」
「さっき自殺しかけてた」
「嘘でしょう？」
「死んだ奴は嘘をつかないって言わなかったっけ？」
「どうして彼が自殺したりするのよ。子供が出来て、再婚して、今が一番幸せなはずじゃないの」
「姉さんは、大切な事を忘れてる」
「何？」
「龍だよ。にこにこ笑う龍」
「でも、それはもう終わったのよ。二人で居る必要がなくなったから、別れたのよ」
「しかし、旦那はそうじゃなかった。姉さんと別れる事を望んで無かったんだ」
「そんな事言われたって、私にはどうしようも無いでしょう？私が彼の新しい奥さんや子供と一

緒に住めば良かったって言うの？」

「そうは言わない。すべての出来事は起こるべくして起こっている。だから、誰も間違っただけで無いんだ。さっき姉さんが電話をしてくれた事で、旦那は今夜自殺しないですんだ。つまり、今日はその時期じゃなかったって事だ。それは判るだろう？」

「ええ、判ってる。でも、何故彼は自殺なんて考えたのかしら？」

私は春樹の言った事を全面的に受け入れた。

「悲しい事があった。自分の中で処理しきれない問題に初めて出会った。そんな感じたと思う」春樹流の感情表現だ。

「彼のカルマかしら？」

「そんなとこだ。それに旦那の姉さんへの執着は俺よりも強い。しかし、その自覚が無いんだ。多分、そう言うのを俺が全部受け持ってたんだらうな」

「荒魂と和魂の役割り分担？」

「そんなとこ。俺だったらもっとうまく立ち回れたんだらうが、旦那には無理だったみたいだ」

「どう言う事なの」

「男と女の事には練習が必要なんだよ。練習無しでウイスキーを沢山飲んだ奴がどう成ったか覚えてるか？」

「二日酔いで酷い目に遭いました」正巳がそれに答えた。

「それのもっと酷い奴。つまり、死ぬ程辛いつて言う奴だ」それを受けて春樹が言った。

「それで彼は自殺を？」

「明日旦那から直接聞けば良い。プライドがあるから言うかどうかは判らないけどな。でも、姉さんにだったら正直に言うんじゃないかな？」

「それで私にどうしろって言うの？」

「そんな出過ぎた事を俺は言わないさ。それは姉さんが好きにすれば良い。とにかく俺は今日姉さんを抱きたかった。だから、無理やり五十嵐を連れて来た。それのついでにちょっと旦那に電話してもらっただけだ」春樹らしい言い方だ。

「そう、見殺しにするのはちょっと気が引けたって感じ？」

「違う。俺は俺のしたい事しかしない。誰の為にも成りはしないさ」

「そうね。私もそうよ。私のしたい事しかしない。それで良いのね」

「それで良い」二人の間にそれ以外の言葉は必要なかった。

「ちょっと待って下さいよ。そんなに簡単に片付けて良いんですか？めぐみさんの旦那さんは自殺しそうなんではしょう？」正巳が言った。

「そうだ」春樹が答える。

「このまま放っておくんですか？」

「俺は、止めたかったから止めた。それ以上何が出来る？」怒っているのではない。正巳に考える事を促すように春樹がそう言った。

「何がって・・・」正巳にはそれが分からない。

「正巳、取り敢えず春樹は吉野の自殺を止めてくれたのよ。後は、吉野が考える事だわ」

「めぐみさんまで・・・」

「だったら、今の私に何が出来るって言うの？彼は明日此処へ来るって約束した。私はそれを拒みはしないわ。彼が此処へ来て、何かが変われば、私はそれに対処するだけ。それだけで充分じゃないかしら？」

「愛してるんでしょ？」

「もちろんよ。私達は憎み合って別れた訳でも、愛が無くなったから別れた訳でも無い。ただ、状況が変化して別れただけ。だから、また状況が変化したらそれなりのやり方で対処すれば良いのよ」そう言って微笑んで見せる。

「良く判りません」

「お前は判らないんじゃないくて、判りたくないんだ。だからそのまま黙って見ていれば良い。姉さんがどう生きるか、それを見せてもらえ」春樹が言った。

「そんな大層なものじゃないわ。私はいつも行き当たりばったり。今の状態をすべて肯定するとしたらこうなるのよ。吉野はまだ生きている必要があるから私の電話を受けた。そして、私が電話をかけたって言う事は、私にとっても何か意味があるって事。それが判るまでその問題と付き合い合えば良いって思うだけ。今から吉野を探して走り回っても、会う必要が無ければ、会えないでしょう？それよりも、彼が明日此処へ来るって言った限り、彼にとって明日までの時間が必要なんだと思ったわけ。此処へ来るまでの時間を使って、彼は何かしら自分を表現する言葉を見つけて来るはずよ。私はそれを受けて、次にしたい事へ繋がれば良いと思うの。春樹は自殺を止めたから止めたって言ったでしょう？要するに彼は今夜は自殺しないって言う事よ」

「めぐみさん。判りました。僕はやっぱりどこかで人を信じて無いんですね。確かに梶さんは止めたって言った・・・」恥じるように正巳が言った。

「それはそれで良いんじゃない？それはあなたなりの優しさよ」

「姉さんは本当に五十嵐には甘いな」春樹が言う。

「良いじゃないの。私の可愛い正巳君ですもの」私が笑って茶化す。

「僕、六歳じゃないです」正巳が言った。

「子供は寝ろ寝ろ。大人はこれからする事があるんだ」春樹が正巳をからかう。

「梶さん！僕の体ですよ」正巳がむきになる。

「四国でみたいに飲み過ぎるな。役に立たなくなる」春樹が言う。

「あっ、すみません」正巳が四国での事を思い出して、本当にすまなそうに言った。

「馬鹿言っていないで、ほら、もっと飲みなさい」私はそう言って彼のグラスにワインを注ぐ。

「姉さん。ウイスキーにしてくれないか」春樹が言う。

「分かった」

私は食べ終わった皿をキッチンで片付けながら彼にオンザロックを作る。そして灯りを暗くして彼の所へ戻る。

「どうぞ」私はそう言って彼の前にグラスを置く。

「サンキュー」春樹はそう言って、おいしそうにそれを飲んだ。

「やっぱり変な奴」私はそう言って、彼のとなりに座る。

春樹が肩を抱いて言う。「愛してる」

私も彼にもたれ掛かって言う。「私もよ」

「この体でも、良いか？」春樹が言った。

「良いわ。どっちも好きだから」私が答える。

「それは良かった」春樹がそう言って強く抱き締めた。

正巳の体に降りた春樹は、生きていた時と同じやり方で愛してくれた。私には、それが春樹意外の者だとは思えなかった。つまり、私を抱いたのはやっぱり春樹だったのだ。

彼は少し眠って酔いを冷ます。目覚めた時私が尋ねる。

「そろそろお引き取り願った方が良いのかしら？」

「ああ、そうしてくれ」春樹が言った。

「春樹、帰って」私がそう言うのととても簡単に正巳一人に戻った。いつもなら二、三分かかるが、一緒に存在出来るようになったからか、スイッチを切り換えるような感じで正巳一人に戻った。

「正巳？」彼の隣に腰を下ろして、一応確認する。

「はい」正巳は頷いて見せた。

「なんだか、恥ずかしいわ」私は正直に言う。本当に恥ずかしかったのだ。確かに私は春樹と寝た。しかし、やはりその体は正巳のものだった。

「僕もです」横目を見た正巳は少し赤くなって言った。

「ごめんなさいね。あなた疲れていない？」何を言って良いのか分からない。

「大丈夫です。でも、今夜眠れないかもしれない」正巳は前を向いたまま言った。

「どうして？」彼の横顔にそう尋ねる。

「こんな経験初めてですから」彼は俯いてそう言った。

「そうね。本当にごめんなさいね。あなたには本当に申し訳ないって思ってる」

「そうじゃないですよ。今まで何度も梶さんに抱かれたけど、梶さんがどんな風感じてたのかわかって、全然知らなかった。でも、今日それを体験して、ものすごく大きな愛をもらってたんだって感じました。そしてそうする事によって梶さんがあんなに喜びを感じていたなんて・・・」

「そうね。やっぱりあいつは愛の達人ね」私は浩二君のくれた百合の花を見ながらそう言った。

「めぐみさんもですよ。僕は本当に素晴らしい人と出会ってる」彼が目を上げて言った。

「それはどうもありがとう。でも、もう少し自分の欲望をコントロール出来るように頑張るわ。だって、これ以上あなたに迷惑かける訳にはいかないもの」今度は私が俯いてそう言った。

「めぐみさん。すべて認めてしまえば良いんでしょう？いつも僕にそう言ってるじゃないですか？自分を否定するのはやめろって。僕にとっても必要があるからこの状況を僕が引き寄せてるんですよ。めぐみさんの為じゃない。今日僕はめぐみさんと梶さんからとても大きなものをもらったし、それは素晴らしいものだった。今度は僕が誰かにそれを与えられれば良いんだ。僕が光になる。僕が愛になる。それが大切だって言ってくれたじゃないですか。僕にそれが出来るようになったら一番初めにめぐみさんに光をあげますよ」正巳はそう言って前を向いたまま私の肩に腕を回す。

「ほんと？本当に私なんかと寝た事、嫌じゃなかった？」私は彼の横顔に尋ねた。

「梶さんのした事です。僕は眠ってただけ。めぐみさんこそそんな変な事気にしないで下さい」彼はちゃんと目を合わせてそう答えた。

「そう？本当に大丈夫なのね。ありがとう」私は笑って見せる。

正巳はそのままそっと抱き締めて軽い口づけをした。

「これが僕のやり方です。覚えておいて下さいね。梶さんと一緒に存在出来るように成ったし、どっちがどっちか分からなくなるといけないから」

「大丈夫よ。目を閉じればすべてが見えるから。でも、体の感覚も大切なのよね」

「そうですよ。僕を見ながら梶さんの名前を呼ばれたら、ちょっと辛いかもしれない」

「今夜、何度かあった？」私は不安になって尋ねた。どこかで正巳だけは傷つけないと言う思いに捕らわれているのだ。

「大丈夫です。今夜は全面的に梶さんに明け渡しました。僕だってそんな野暮じゃないですから

。でも、体の方は覚えてるけど・・・」

私は俯いて赤く成る。

「ほら、そんなに恥ずかしがらないで。僕だって愛してるんだから」正巳はそう言って肩に回していた手を離すと、いつも春樹がするようにその手で頭を掴んで揺すった。

「あなたまで、それをするの？もっとレディーとして扱ってよ」私は春樹に言うのと同じ事を正巳にも言った。

「愛してる」正巳はそれにそう言って答えた。

「ありがとう」私はそう言った。

「僕を愛して無いんですか？」正巳が言う。

「ごめんなさい。そうじゃないの。さっき春樹に愛してるって言ったから、一晩で二人にそれを言うのってなんだか気が引けたのよ」

「めぐみさんも変な人ですね。じゃあ、明日になったら言ってくれますか？」

「多分、明日は駄目よ。だって吉野に言う事になると思うから」

「僕は最後って言う事ですね」

「分かったわ。愛してるわよ。正巳の事、一番愛してる。これで良い？」

「投げやりですね。でも、まあ許しましょう。いつか実力でめぐみさんの愛を勝ち取って見せませよ」

「ご健闘を祈ります。あなたの必要なものは既にすべて持ってるって事、忘れないでね」

「めぐみさんこそ、明日は大変かもしれませんね。頑張ってくださいよ」

「どうもありがとう。私は何を学びたくてこんな状況を呼び寄せたのかしらね。全く、訳が分からないわ。だって、春樹がなぜ私の元夫を助けたいって思う訳？」

「めぐみさん。ちゃんと知ってるんでしょう？」正巳が言った。

「知ってるわよ。でも、たまには文句でも言って、気を紛らわせたかったりするの人間よ」

「だから、わざわざ梶さんが僕を連れて来たって言う事ですね」

「そうですね。あいつはそう言うの、敏感だったから」

「そんなふうに見せずに心遣いをするから、みんなに慕われたんです」

「それなりに良いところもあったのね」私はそう言って笑って見せた。

「僕だって、良いところ一杯ありますよ」正巳が膨れて見せる。

「はいはい。分かってますよ。私の可愛い正巳君ですもの」

「一度聞きたかったんですけど、どうして僕の子供の頃を知ってるんですか？」

「夢よ。あなたがお父様の話を持ってきた日の昼間に、夢を見てたの。おぼさんの回りは堇のお花の色だってあなたが言ったのよ。春樹って言うおじさんに教えて貰ったから、ずっと後の人だって知ってるって」

「夢で繋がったんですか」

「そう言う事。色んな方法があるのよ。要するに必要なものが必要な時にやってくるって言う事じゃないかしら？」

「時って面白いですね」

「そうね。でも、本当にあなた可愛かったわよ」

「そうですか？」

「もちろん今も可愛いけどね」私はそう言って笑った。

「やっぱりめぐみさんにはかなわない」正巳はそう言って首を振って見せた。

私はその夜久しぶりに春樹の残したエネルギーの場の中で眠った。

「藤の花って綺麗ね。とても落ち着いた感じで、大人の花って感じがするわ。それに、上質なお香のような香り」

吉野と二人、奈良公園のベンチに腰を下ろし、藤棚を見上げている。薄曇りの空に溶け込むような薄紫の花が棚一面にぶら下がっている。遠くの方に修学旅行生達が、観光ガイドに連れられて南大門の方へ歩いて行くのが見える。

午後吉野が車でやって来て、そのまま吉野の提案でドライブに出掛けて来たのだ。

「そう言えば、藤の花を二人で見るのは初めてだな」吉野が言った。

「本当ね。この時期はいつも躑躅を見ていたわ」

「ここにも躑躅が沢山咲いてるね。満開の躑躅のむせ返るような強い香りがめぐみは好きだったね」

少し離れた場所に躑躅の紫がかかった赤い塊が見えた。

「ええ、南国の花の香りに似てるのよ。でも、そろそろ藤の気品ある香りも良いわ。年を取ったって言う事かしら？」

「年は取るんじゃないかって重ねるんだよ。君はとても素敵に年を重ねて来たね」十五年以上親しんだ彼の優しい言い方だった。

「どうも、ありがとう。あなたにそんな風に言ってもらえると嬉しいわ。あなたには随分迷惑をかけたし、傷つけました・・・」私は足元の小石を見ながら言う。

「そんな事無いよ。僕の方が沢山君を傷つけたかもしれない」彼も、足元に目を落として言った。

「私、あなたに傷つけられた事なんて一度も無いわ。あなたはいつも私を大きな心で包んでくれたし、こんな私を愛してしてくれたじゃない」

「僕はそれすら気づかずに生きていたんだ。おかしいだろう？僕は、君が出て行くまで自分がどれだけ君を愛していたのかすら知らなかったんだよ。そんな馬鹿げた事ってあると思う？」彼はそう言って藤の花を見上げた。

私は首を振って見せる。吉野はそれを見て続ける。

「彼女とは別れたよ。僕は結局自分の為に周りの人を不幸にしてしまうんだ」彼の目は、藤の花を通り越して、もっと遠くを見つめているように見えた。

「どう言う事？何があったの？」彼の横顔に問う。

「君が出て行った夜、僕は一人で君の居なくなった部屋の前で泣いた。君が僕にとってどれだけ大切だったのかを空っぽの君の部屋を見て初めて知ったんだ。それで、その気持ちを彼女に正直に伝えた。『僕は君を妻以上に愛せない。妻と同じだけ愛する事も出来ない』って言ったんだ」彼はまた、足元に目を落としてそう言った。

「酷い」私は思わず言う。

「そうさ。本当に僕は酷い男だ。彼女はそれを聞いて怒ったよ。そして色々な物を僕に投げ付けた。そして、『子供が出来たなんて嘘。あなたなんてもう大嫌い』って・・・それで終わった」淡々とした調子で彼はそう言った。

「それ、彼女の嘘でしょう？」私は直感的に言った。

「判らない。彼女は次の日に会社を辞め、住んでたマンションからも居なくなった。僕もちょっと色んな事を整理したくって一週間休暇を取ったんだ」

「あなた、ちゃんと彼女の居場所を見つけたんでしょう？」彼の横顔からそれが読み取れた。

「いや・・・」彼はそれに答えようとはしない。

「嘘よ。あなたはちゃんと彼女がどうして居るのか知ってる。そして、彼女が本当に妊娠していたのもちゃんと知ってるわ。なのに何故、それから目を逸らすの？あなたはそんな人じゃないでしょう？」私は彼を詰るようにそう言った。

「めぐみ。僕はそんな酷い奴なんだ。自分の事だけしか考えられない自分勝手な男なんだよ」彼は否定しなかった。

「ねえ。聡二郎さん。自分を卑下するのはやめて。あなたが今本当にすべき事から目を逸らせないで」私は自己否定に走って、何もしようとしない彼に腹を立てていた。

「君が怒るのも無理ないと思う。こんな僕が元夫だったって思ったら腹も立つだろう」

「聡二郎さん。私はそんな事を言いたいんじゃない。私は私の大好きなあなたが、あなた自身によって否定されるのが嫌なの。私の大好きなあなたを嫌いにならないで。あなたはそんな酷い事をした自分をもちゃんと受け入れるべきよ。人はそんなに世間的に正しい事ばかりする生き物じゃない。不倫で離婚した私が言うべきじゃないけど、私は自分のした事を後悔したりして無いわ。だからあなたもあなたのした事を後悔するべきじゃないって思うの」

「君は相変わらずだね。でも、僕はもう取り返しのつかない事をしてしまったんだ。本当は・・・。彼女は自殺未遂で入院してるんだ。そして、子供はだめだった・・・」

吉野はそう言うと、押さえていたものが一気に流れ出したように頭を抱えて嗚咽を漏らす。

「泣かないで。泣いてたって仕方ないでしょう？それよりも、今あなたに出来る事は何かを探さなきゃ」私は子供の死に動揺しながらもそう言った。

「僕には何も出来ないんだよ。彼女は精神に酷いダメージを受けていて、何も判らないようになってるんだ」吉野は嗚咽を飲み込むようにしてそう言った。

「最悪の状態って言う事ね」私はため息交じりに言った。

春樹の言ったとおりだ。かなり酷い状態。それも、種を蒔いたのは私自身。私に今出来る事は何だろう？いや、そうじゃない。今、私が何をしたいのか見極める必要があるのだ。多分、この男は私と会った後、死のうと思っている。昨日電話を受けて、死ぬのを一日延ばしただけだ。十五年も夫婦として暮らしていたのだ、それぐらの事は判る。私は今この男を失いたくないと思っている。そして、この男が死んだところで、死んだ子供も生き返りはしないし、病院で寝ている彼女が回復するとも思えない。

「あなた、彼女を愛してるの？」取り敢えず大切な事を確認する。

「いや、彼女にも言ったように、君以上には愛せない」彼はそう言い切った。

何が彼にそう言わせたのだろうか？私には分からない。彼の愛は彼のものでしかないのだ。

「愛そうと思う？」もう一度尋ねる。

「駄目なんだ。僕は愛せない。それどころか、何の罪も無い彼女が憎かったんだ」虚ろな目でそう言った。

「何故なの？」私が尋ねる。

「彼女のせいで君が出て行ってしまったから。彼女がいなければ君は僕の傍に居続けていたはずなのに……。分かってるよ。それは僕の思い違いでしか無いって言う事は。けれど、今の僕の思考はそんな風になってしまってるんだ」

根本的な問題だ。春樹と出会う前の私がそうであったように、この男も愛が判らないのだ。だから短絡的に自己破壊へと思考が向かってしまう。

「何故あたは昨夜死ぬのをやめたの？」私は彼にショックを与えてみようと思ひ、そう言った。「めぐみ……」彼はそう言ったまま言葉が続かない。

私は静かに笑って見せる。

「君は一体……」やはり言葉が続かない。

「私と会った後で死のうなんて、酷すぎない？まあ、私に責任が有るのは確かだけど、それを私に確認させるつもりだったの？それでちょっとぐらい罪の意識を持って貰いたかったのかしら？でも、私は罪の意識を持ったりしないわよ。だって私は何も後悔したりしないもの。ただ、あなたを失った悲しみに泣くかも知れないけど、それは純粋な悲しみとして泣くだけよ」

ちょっときつく言い過ぎただろうか？

「随分酷い言い方だね。いくら僕だってそんな面当てみたいなのをしたりしないよ。ただ、僕の唯一愛する君に会いたかっただけだ」彼は少し意地になってそう言った。

「最後の思い出に？」私はそれに追い打ちをかける。そう言えば、私達の夫婦ゲンカとは、大体こんな感じだった。

「違う。僕は死んだりしない。そんな弱い男じゃない」

吉野はまんまと引っ掛かっていた。私は心の中でほくそ笑む。こうして私はいつも夫婦ゲンカに勝利したのだ。

「良かった。私は、もう愛する人の死には出会いたくないわ。あなたの半分を失っただけであんなに辛かったのに、もう半分も失ったら、私本当に気が狂ってしまうかも知れない。きっと今度は秦君も助けに来てくれないでしょうね。それに、入院してもあなたは傍にいてくれない訳でしょう？ちょっと辛すぎるわ」私は素直にそう言う。

「僕と別れる時には泣きもしなかつたくせに」吉野が言った。

「あの時私はあなたを失うって思わなかったもの。私があなを愛するのと、あなたが誰かを愛しているのは関係のない事よ。だから、別れる事があなたを失う事だって思えなかったの。それでもちゃんと泣いたのよ。でも、あなたの命がなくなると、私の愛は過去にしか向かわなくなる。春樹は私の中で行き続けているけど、多分あなたは無理。彼みたいに不思議な力がある訳じゃないし……」

「何故僕が梶君の半分なんだい？」彼は不満げに、しかし、優しい口調でそう言った。

「あなたも春樹も私を愛する為に生まれて来たからよ。春樹は不思議な力を使ってそれをしようとした。でも、あなたは普通の人として私を愛しようとした。その違いだけ」

「すごい自信だね」本当に私の答えに驚いたようにそう言った。

「だって私、自分自身を愛しているもの。あなたの愛も春樹の愛も否定しないわ。それは私とは

根本的に関係のない事だって知ってる。愛ってね、与えるものでも奪うものでも無いのよ。ただ、愛するだけ。相手がどうであれ、関係ないの」私が知ってしまって、知らんふり出来ないようになってしまった大切な事。

「それじゃあストーカーだって愛してるって事になるよ」

「そうね。でも、ストーカーは最終的には自分を愛して欲しい訳でしょう？愛して欲しいから愛してるの。何だかとっても卑しい感じがしない？」

「愛は卑しくないのかい？」

「もちろんよ。愛はもっと崇高なものであって欲しい。もちろん、いろんな形の愛はあると思うし、それを否定する気は無いけど……。だから私はあなたの愛の問題に関われない。あなたの問題はあなたが片付けないと終わらないわ。私がしたいのは、あなたを愛し続けていたいだけよ」

「僕とは関係無しに、君は僕を愛してるって言うんだね」彼は念を押すようにそう言った。

「そうよ。私の愛する人が幸せでいてくれる事はとても素敵よ。でも、人は幸せにも不幸せにも生きる事が出来るし、それを選ぶ権利も持ってる。だから不幸せでいようって思って生きている人を否定する事は出来ないわ。だって、それは個人の選択ですもの」

「何故みんな幸せじゃいられないんだろう？」

「不幸せを選ぶからよ」

とても簡単な答えだ。

「だったら、僕は自分の意思で不幸せを選んでいるのかい？」

「あなたが今の状況を不幸せって感じているのならそう言う事ね。でも、私にはそんなに不幸せだとは思えないけど」

焦点を当てる場所の問題だ。

「どうして？僕はこんなに混乱していて、自分の無力さ不甲斐なさにくんざりしているのに」

彼は不都合な部分にだけ焦点を当てている。

「だってあなたには愛する者もいるし、愛してくれる人も持っているんでしょう？あなたの為に死を選ぶ程、彼女はあなたを愛してくれていた訳じゃない」

「それが不幸の始まりだった。僕は愛せない人から愛されたんだ」

「贅沢な悩み。でも、愛する事と愛される事が一致する必要なんて何も無いと思うけど。愛って各々個人的なものだから。それに一人しか愛せないなんて何だか寂しいわね」

「君は確かに同時に僕と梶君を愛したけど、普通は一人、つまり配偶者や恋人だけを愛するものなんだよ」

「どうして普通でなきゃいけないの。普通って誰が決めたのよ。私は私で生きるし、あなたはあなたで生きれば良いって思わない？」

「僕は君みたいに器用じゃない」

したくないから出来ないのか、出来ないからしたくないのか……。

「そうね。私だってこんなふうに思えるまで随分時間がかかったし、春樹に沢山サポートしてもらったわ。彼は本当に愛する事に関しては達人だったの。きっとあいつがその部分を全部受け持っていたのね。それであなたにそれが残って無かったのよ。こんな言い方をすると、きっとあなたは傷つくのよね」

「そのとおりだ。何故、僕はいつも梶君と比較されなければならないんだい？」

「ごめんなさいね。比較している訳じゃないのよ。私の中で分析しているの。それを口に出しちゃいけないのに、あなたの前ではいつもありのままを話してしまう。また気を悪くするかもしれないけど、春樹はね、特殊な力を持っていて人の心が読めたの。だから私は何も隠せなかった。でも、あなたはそんな力を持ってはいないけど、私はあなたに何も隠せないのよ。結局同じ。私はあなたとこうして花を見るのが大好き。出雲の桜を二人で見られなかったのは残念だったけど・・・」

「梶君と出雲の桜を見たのかい？」

「ええ、彼の形代と見たわ」

「形代って何？」

「五十嵐正巳君よ。彼が春樹の指示でわざわざ八重垣神社まで来てくれたの。夢で指示されたんですって。それで、一日松江でお花見に付き合ってくれたわ。松江城の桜、とっても綺麗だった。それで二人でお堀巡りの船に乗ったりして恋人ごっこして楽しんだの。そして夜私が泣くのに付き合ってくれたのよ」

「めぐみは五十嵐君も愛しているの？」

「ええ。愛してるわ。あなたや春樹に持っている種類の愛とは少し違うかも知れないけど、でも、愛には変わらない。だって私は彼も、そのままの彼で素敵だと思うし、彼が自分の力で変わっていくのを見るのも大好き。ただ、あなたや春樹への愛は、私と何かしら関わりながら同じものを学んだり楽しんだりする事が出来る愛だっただけ。でも、それももう終わったんだって思ってた。だから私はあなたとの別れを純粹に悲しもうと思って一人で出雲へ行ったの。桜の花に悲しみを預けて散らしてもらおうって思った」

「でも、結局一人じゃなくて五十嵐君と一緒にだったんだね」

「そう。春樹が死ぬ前に約束したの。『絶対に一人にしたりしないから心配するな』ってね。その約束を守ってくれたのよ。『いつもそばにいて抱き締めてやる』とも言ったわ。そう言った彼はさっさと肉体を捨ててしまった。でも昨夜『死んだ奴は嘘をつかない』なんて言ったのよ。変でしょう？」

「僕には理解出来ない」彼はそう言って首を振る。

「そうよね。でも、私は感じる事が出来る。彼が側にいる事も、あなたと彼が一つのもの違う側面でしか無いって言う事も。ごめんなさいね。やっぱり私はあなたのプライドをズタズタにしましたわね」

「かまわないさ。今僕はプライドを持ってられるような状況にいないから。でも君と話していると現実が遠くの方へ行ってしまうような錯覚に陥るよ」

「あなたにとっての現実って何？」

「それは、彼女が入院してしまった事だとか、子供が死んでしまった事だとか、それらの責任がすべて僕にあるって言う事」

「重いものを背負ったわね。あなたはそれでどうしようって考えてるの？」

「僕にはどうしようもない・・・。だから・・・」

「だから？」

「・・・」

「だから死のうと思ったのね」私が言う。

彼は黙って頷いた。

「あなたよく考えてみて。あなたが死んだところで何が変わるの？すべての問題がそこで凍結されてしまうだけよ。彼女の怒りや悲しみは、行き場を失ってもっと内へ向かうわ。きっと回復するのに大きな努力が必要になるでしょうね。彼女だって幸せになる事は出来るのよ。彼女がそれを選択すれば良いだけなんだから。でも、凍結された問題はいつか溶け出す。それはあなたにとっても彼女にとっても同じ。もしかしたら今の状態が、昔凍結したものが溶け出してるのかも知れないけど」

何かの因縁が有ったのかも知れないと思った。

「どう言う事？」彼が問う。

「ほら、前世のカルマって言うの・・・」

きっと彼は信じない。

「また、そっち方面の話かい？」

やはりそうだった。私は自分の視点を変える。

「判った。現実的な話をしましょう。あなたが死んでも何も解決されないって言う事を良く理解して。さっき私が言ったように自殺しそこなった彼女に追い打ちをかけるだけ。もしかしたら彼女はもう一度自殺って言う行為をやり直してしまうかもしれないわよ。だって、自分が失敗した事をあなたにやられたんじゃないものじゃないもの。彼女がどんな人なのかは知らないけど、女にも意地って言うものがあるのよ。それに、あなたが死んでも失ってしまった子供は生き返りもしない。あなたが生きていれば、あなたを恨んで、その思いの出口を作る事だって出来るのに、あなたがこの世に存在しなければそれも出来なくなってしまう。彼女の感情は出口を完全に失ってしまうわ。私もあなたを失いたくは無いけど、どうしてもあなたが自殺したいのならそれも認めざるを得ないと思う。だってそれも個人の自由だから。それは確かに辛くってたまらない出来事だと思うけど、時間が悲しみを癒してくれるのも今は知ってる。私はあなたを恨む事で癒すべき傷なんて持って無いもの。私が癒すのは悲しみだけ。でも、彼女は違うと思うの。怒りや恨みをぶつける相手がしばらくは必要だと思うわ。それが内に悲しみを溜め込まない方法の一つだから」

「僕は恨まれる為に生きていなければならないのかい？」

「彼女を傷つけた時、それぐらいの覚悟はあったんじゃないの？」

「いや、何も考えてなかった」

「呆れた人ね。でも、それも良いかもしれないわ。あなたはその時初めて頭で考えたんじゃないわ、心で行動したって言う事だから。きっと何かが変わろうとしているのよ。楽しみだわ」

「めぐみ。楽しみはないだろう？」窘めるように彼が言った。

「そうかしら？きっと楽しい事が一杯あると思うわよ。取り敢えずあなたはもう自殺したりしな

いんでしょう？」

「ああ、そこまで言われて死ぬのもね」

「だったら、一つづつ問題を解決して行くしか無いって言う事じゃない。もし、どうしようもなければ、逃げちゃうって言う方法もあるのよ。別に死んでしまわなくっても、此処からいなくなる事は可能なんだから。そして、時が問題を解決するのを待つ。死ぬより簡単だと思わない？ 誰にも迷惑かけないし、彼女の恨みをまともに受けなくて済むわ」

「でも、僕はめぐみの傍にいたい。季節季節にはこうして一緒に花を見たり、美味しいものを食べて笑い合ったりしたいんだ。君も一緒に逃げてくれるかい？」

「嫌よ。私誰からも逃げる必要なんて無いもの」

「ほらね。だから僕は君の傍に居たいんだ。傍って言っても同じ家で無くても良いけどね」

「だったら、逃げる事もしたくないって言う事ね。なのに死のうと思ったのって変じゃない？ だって死んじやったらもう会えなくなる訳でしょう？」

「本当だね。ちゃんとものが考えられなくなってたんだ」彼はゆっくり頷いてそう言った。

「人の持っている弱さよ。私も四国で悪霊に取り憑かれた正巳に殺されかけた時、『このまま殺してもらえれば、春樹のところへいける』って思ったもの。でも、そんな間違いだって知ってる。だって、生きているから春樹と一緒にいられる訳だし、誰かを愛していられるのに。でも、それでも、そんなふうになってしまう人の弱さが私は大好きよ。あなたにもその弱さがあって言うのを知ったのは、とても意味深い事だとも思う」

「めぐみはどうしても梶君から離れられないんだね」呆れたように言った。

「あなたからもよ。同じだけ愛してるの」私は彼の目を覗き込んでそう言う。

彼は目を閉じて首を振って見せた。そして言う。

「今日のスケジュール空いてるの？」

「ええ、大丈夫よ」

「僕の相談に乗ってもらったお礼に、この奥の旅館を取ってある。そこで美味しいものをご馳走するよ。出雲に連れていけなかったお詫びだ」

「もしかしてそこで心中しようって思ってたとか？」

「そうだよ。めぐみが眠ったら首を締めて殺して、僕も後を追おうと思ってたんだ」

彼は微笑んで言った。冗談めかしてはいたが、半分以上本気だったのが私には判った。

「凄いわね。テレビのサスペンスドラマみたい。でも、それも一つの在り方ね。もし、今夜決行したくなったらそれでも構わないわよ。私はあなたに殺してもらうのも悪くないって思うから」

私は本気だった。本気でそれでも構わないと思った。私の中で命の重さが軽くなり過ぎているのだ。思考が自己破壊へと向かっているのは、吉野だけではないようだ。

彼はじっと私の目をのぞき込んで言う。「有り難う。でも、めぐみももっと命を大切にした方が良いよ」

私はプツと吹き出して言う。「あなたに言われたくは無いわね」

「それもそうだね」彼もそう言って笑った。

私達はベンチを立ち、鹿の背中を撫でたりしながら、手を繋いで公園を散歩する。そして、商店街まで出て、泊まるために必要な着替えを買った。離婚する前も、離婚してからも、良く二人でそうして買い物をしたものだ。二人の日常生活。

この後、市営の駐車場に止めてあった車を動かして、ちょうど良い時間に、彼の取ってあった若草山が見える閑静な純和風の旅館に入った。

玄関を潜った時に、一瞬にして身の毛のよだつのが感じたが、私はそれを受け流した。彼が名前を告げると、よく手入れされた庭に面した離れの部屋に案内された。庭には小さな藤棚があり、そこにも藤の花が咲いていた。

吉野と私はテーブルを挟んで座る。
「夫婦みたいね」私が冗談で言った。
「元ね」彼がそう言って笑う。
「何だか不思議な感じよ」本当にそんな感じがしたのだ。
「どうして？有馬へ行ったのだからそんなに前じゃないだろう？」
「そうだったわね。でも、やっぱりちょっと変よ」
「前に居るのが僕じゃ気に入らないって言う事かな？」
「違うわよ。何か、みんなが私を殺そうとしているみたいな気がするの。それを私はどこかで期待している。やっぱりどこかおかしくなってるのね」
春樹を失った時の後遺症だろうか？それを敏感に感じ取って彼が言った。
「めぐみは、何故そんなに梶君の元へ行きたいんだろう？」
「それも良く分からないのよ。あいつがあんまりにも簡単にあっちへ移行してしまったから、私の中にも道がついちゃったんじゃないかしら？」

自分でも良く判らない。

「君にも不思議な力があるのかい？例えば梶君が持ってたような・・・」

彼はそれを否定してほしいのだ。しかし私はやはりありのままを告げる。

「あいつが死ぬ時に私に預けて行ったの。だから、あいつが持っていた力は使える」
「それで、僕が死のうと思ってたのが分かったの？」彼は受け入れるしか無い。
「春樹が昨夜わざわざ正巳をよこして、彼が降りた正巳から聞かせられたわ」
「どう言う事？」
「いつもは心の中で会話出来るの。でも、大切な事だから耳で聞いた方が良くて、わざわざ正巳に降りて話してくれたのよ。プライドがどうのこうのってとても言いにくそうにしていたけど、結局すぐにあなたに電話するようになって言われて電話したのよ」
「あの時ちょうど、車のまま海に飛び込もうとしていたところだった。携帯が鳴って、無視しようと思ったけど、なんとなく未練があったのかな、最後に誰かと話すのも良いような気になって出たら君だったんだ。それで今日会う約束をしたから、一日延ばす事にした」彼はお茶をすすりながらそう言って笑って見せた。
「そうだったの。春樹が随分焦ってたから、そんな事だろうって思ってたけど・・・」
「どうして梶君が僕の事をそんなに心配してくれたんだろう？」
「彼と直接話してみる？」
「まさか電話が繋がったりしないんだろう？」

「それ、面白いわね。一度やってみる価値はあるかも知れない。でも、簡単なのよ。私が呼べば、私に降りて来るの。でも、とっても変なのよ。昨日初めて正巳と春樹が同居出来て、それがすごくおもしろいの。だって自分自身で言い合ったり、からかったりするのよ」

「良く分からない」彼はそう言って首を振る。

「ちょっと聞いてみるわね」私はそう言って心の中で春樹に尋ねる。

『ねえ、春樹。彼と直接話してみる？』

『姉さん、勘弁してくれよ。一番初めの時に姉さんの旦那とは会いたくないって言った だろう？』

『なに子供みたいな事言ってるのよ。それにあなた彼と電話で話した事あるでしょう？』

『あの時は、姉さんを見失ってパニックになってたから・・・』

『だったら、それを謝れば？』

『姉さんから良く言っておいてくれ』

「なんか蟠りがあるみたいよ。春樹がこんなに根性無しだとは思わなかった」私は笑いながら吉野にそう告げた。

「僕は、梶君の気持ち分かるよ。僕だってなんか嫌だ。でも、彼は何故僕を助けようと思ったんだろう？」

『春樹何故なの？』私が心の中で尋ねる。

『姉さんを一人にしないって約束したから。それに、旦那は俺の半分だ』

「私を一人にしないって約束したからですって。それとあなたが自分の半分だからって言うわ」

「本当に梶君はめぐみの事を愛してるんだ」

「あなたと同じだけね」私が言った。

『違う、俺の方がずっと姉さんを愛してる』突然春樹が私の口を使って言った。

「勝手に死んじゃった奴が何言ってるのよ。少なくとも吉野は生きてるのよ」私は春樹に向かって言う。

『それは、仕方無かったんだ。それに体を捨てる事で姉さんと一つに成れた』

「聡二郎さん、聞いた？こんな奴なのよ」私はそう言って笑う。

「めぐみ、今のが梶君なの？」

「そうよ。負けず嫌いなの。死んでまでもあなたと張り合ってる」

吉野は俯いて首を振る。

「めぐみ、一度病院で診てもらった方が良いよ。多重人格症かも知れない」

『吉野さん。それは無いでしょう。確かに、この状態は普通では無いですが、姉さんは病気じゃない。私だってあなたに文句を言いたい事が有るんです。こんないい女を何故悲しませたんですか。何故、もっと上手にだましてやってくれなかったんですか』

「本当に梶君なの？」吉野が言った。

『そうです。一度電話でお話ししましたよね。私が姉さんを探して家の方に電話した時、オフィスの方だって教えて下さった。あの時は本当に失礼しました』

「そんな事気にしないで下さい。もう昔の事です。それよりも、梶君にめぐみを悲しませたって

文句を言われる筋合いは無いな。君の死がめぐみをこんなふうにしてしまったんだ」

『それはそうですが……。でも、私は姉さんを一人にしたりしていない。それに今は吉野さんの妻じゃない訳ですし、私だって姉さんを愛してるんですから……。それを言う権利はあります』

「春樹、何緊張してるのよ。あなたが自分の事、私なんて言ってるの初めて聞いたわ」私はそう言って笑う。

『姉さん。そんなに笑うな。俺だって苦手なものぐらい有るんだ。だから呼ぶなって言っただろう？』

「分かったわよ。あなたもう黙ってて良いわ。聡二郎さん、こんな感じでいつも私の中に彼が居るの。そして、正巳に降りたりもする。変なのよ。こんな奇妙な世界も有るの。あなたが現実だっている世界だけじゃないのよ。だって、私はあなたが彼女と別れた事すら知らなかったし、まして自殺しかかって居るなんて想像も出来なかった。昨夜春樹が突然言い出すまで、あなたは幸せにやってるって思い込んでたもの。でも、実際は春樹が言った通りだったんでしょう？つまり、私の変な現実が、あなたの普通って思っている現実とリンクしていた。だから、私は多重人格症かも知れないけど、それを治療する事を望んでいないの。私の言いたい事分かる？」

「分かったよ。僕が悪かった。梶君にも謝って置いてくれ。あんまりびっくりしたものだから……」彼は確かに混乱していた。

「かまわないわよ。どうせあいつは死んでるんだし」

『姉さん！』

「何よ。もっと喋りたいの？」春樹に言う。

『いや、そうじゃない。俺、多分、旦那に降りられる』

「えっ、ウッソー」

「どうしたの？」吉野が言った。

「あなたに降りられるって言ってる」

「降りるって、憑依するって言う事？」

「そんな感じ。どう？やってみる？」

「嫌だよ。そんなの僕は絶対に嫌だ」

『名前を呼んでみな。多分簡単に降りられる。それに、降りる必要も有る。今夜此処に泊まるんだらう？』

「でも、あなた、本人が嫌がってるのよ」

『だったら、五十嵐を呼べ。此処はちょっとまずい。さっきからずっと感じてたんだが、日が落ちたらそれが強くなってきた』

「何よ。まずいって……」

「めぐみ、どうしたの？何がまずいの？」

「あのね。あなたに降りてほしい事があるんだって。あなたがどうしても嫌だったら正巳を呼べて言ってるわ」

「梶君は何がしたいんだらう？」

「多分、除霊みたいな事だと思うわよ。正巳を呼べて言ってるから」

「僕はそんな事、信じない」

「じゃあ、成り行きに任せましょう」私は吉野に殺される覚悟を決めた事もあって強気で言った

確かにこの場所にはおかしな気が満ちて居る。入った時から、それは感じられた。しかし、そんな場所はいくらでも在るのだ。まして此処はかつての王城の地、平城京の端っこ。どんな霊が残って居てもおかしくは無い。

私は心の中で春樹に言う。

『私は此処で死んでも良い。出来れば吉野に殺されたいけど、それが悪霊でも構わない。心が凍ってしまったらそれもそのまま受け入れる。私、立派な悪霊になってあげるわ』

『姉さん。何故そこまで、欲を捨ててしまったんだ？』

『だって私、したい事も、欲しいものも何も無いのよ。大切なものをすべて手に入れてしまった。後は、やって来る状況を楽しむだけ』

『判った。でも、俺はもっと足掻くぜ。悪霊になった姉さんに俺が憑いてたら、誰も手出し出来ないぐらい強力な悪霊の出来上がりだ。それも面白いかもしれないが、ちょっとぐらい、他人の迷惑も考えようと思うから』

『春樹って、結構正義感が強かったのね』

『俺は姉さんを守らないといけないからな』

『ありがとう。頼りにしてるわ。私が愛の道を歩けるように助けてね』

『こちらこそ、最悪の時には一緒に悪霊の王になろうぜ』

「めぐみ、どうしたの？」

「あっ、ごめんなさい。ぼーっとしてたわね」

「梶君と話してたのかい？」

「ええ、ちょっとね」

「何があるって言うんだい？浄霊の必要が有るって、どう言う事？」

「此処に入った時、一瞬にして身の毛がよだったのよ。多分、それに関係する事だと思うわ。でも、きっと必要が有って、此処に引き寄せられた訳だし、此処で何かする事が有るのよ」

「何をするって言うんだい。嫌だったら此処を出れば良いだけじゃないか」

「そうね。その方法も有るわね。でも、何故か私は此処から出たくないって思ってるのよ。今はそれにどんな意味があるのか判らない」

「まあ良いか。どうせ僕は君を殺して自分も死ぬつもりだった訳だし」彼に本当の意味は理解出来ないだろう。しかし、なまじっか恐れられるより良いかも知れない。

「そう言う事。私もあなたに殺される覚悟を決めちゃったから」

「あんなに怖がりだった君が、随分強くなったね。だって君は吊り橋ひとつ怖くて渡れなかったし、夜一人でトイレに行けないからって僕を起こした事も有った」

「ごめんなさい。色々ご迷惑をおかけしました。でも、今でも吊り橋は怖いよ。それに、誰かに甘えたい時には、そう言って夜中に起こしたりもするの」

「確かに君は、興味深く愛すべき女だよ。梶君があんなに君を愛しているのも納得出来る。でも、僕だって死んだ男なんかには負けないよ。挑戦状を叩きつけられたしね」

「変なの。みんな自分自身と戦ってる」

私達はワインを飲みながら、運ばれて来た料理を食べる。それは最後の晚餐にふさわしいご馳走だった。

結婚生活の十五年間の思い出話をしながら、ゆっくり時間をかけて食事をし、その後檜で出来たお風呂に交替で入った。そして、並べて敷かれた布団に入ったのは、十一時を大分過ぎていた

私はなかなか寝付けなくて何度も寝返りを打つ。隣で寝ている吉野も、同じように何度も寝返りを打っている。私は自分の布団を抜け出して彼の布団に潜り込んだ。

「ねえ、本当に殺してくれるの？」私が言う。

「嫌だよ。そんな気になれない。今めぐみを殺したら、みすみす梶君に渡してしまう事に成るからね」彼はそう言って私の背中に腕を回した。

その時、闇が濃さを増した。空気の重たさも増す。

「あなた、来たわよ」私は彼の腕の中で言う。

「クッククッ」吉野が低く笑った。

背中に回っていた吉野の腕が離れ、そのまま私の首をつかむようにして締め付ける。それは四国で正巳に締められた時と同じぐらいの強い力だった。

痛さと息苦しさに呻き声を上げる間もなく『人って簡単に死ねるんだ』と思いながら、遠のく意識を見送った。

『我は此処にあり』 『すべては我の中に在り』

真っ白い装束をつけたいつかの自分がそう告げていた。白い、いや、色の無い純粋な強い光を発しながらそう言った。

神で在った。その時の私の意識の中でそれは確かに神だった。

人として生まれ、神として育った。そして、神として死んだ。

一つの言葉を告げる毎に、その時の神は人としての死を受け入れた。

その時の神は、一度も土を踏む事なく、死んでも土に返りはしなかった。

移動の時には、輿や梯子に乗り、死した肉体は籠に入れられ喪山の木に吊された。

梯子を担いでいたのが吉野だった。死体の入った籠を吊したのが春樹。

真っ黒いカラスが籠の目から肉を食む。それが消化され、神は初めて土に戻った。

何故あれ程土を忌んだのだろうか？今の私には、それを知る由もない。

もうすぐ土に戻るのだ。この肉体から魂を引き剥がして、此処から居なくなる。

『おばさん！行っちゃ駄目だ！』どこかで子供の声がした。しかし、私はもうそれに答えるのも億劫だった。死によって与えられる安らぎを心から欲していた。

『おばさん！おばさん！・・・めぐみさん！めぐみさん！めぐみ・・・』

正巳が私を呼んでいる。

『ごめんね。おばさん、もう行くの。だから一人で歩いてね』私はそう思った。

「息津鏡 辺津鏡 八握剣 生玉 足玉 死返玉 道返玉 蛇の比礼 蜂の比礼 品々物の比礼
十種の神宝の御名をもって祓う 離れ去れ 汝此処より去り失せよ」

「吾が宝の名をもって、吾は祓えじ」

「汝、取り込もうとするは、汝なり。そは事代主。歳の神、フルの神、物の主」

正巳の太い朗々とした呪文と、男と思われる大きな魂の意志を、耳でないところで聞いた。

「オーッ・・・・・・・・」

その大きな魂が声を上げてそこから遠のいた。

「たまのをを むすびかためて よろずよも みむすびのかみ またまふゆらし たまのをを
むすびかためて よろずよも みむすびのかみ みたまふゆらし たまのをを むすびかためて

よろずよも みむすびのかみ みたまふゆらし・・・・・・・・」

正巳がまた違う呪文を繰り返し唱えた。多分、魂を繋ぎ止める呪文。

「めぐみさん。しっかりして下さいよ」正巳の声を、耳で聞いた。

「ごめんね。おばさんもう行くの」私は朦朧とした意識で答える。

「馬鹿な事言っただけで、めぐみさん！めぐみさん！めぐみさん！」正巳が私の名を呼びながら頬を何度も打った。

「私はめぐみ……。あなたは……。正巳？」私は暗闇の中で、目を閉じたまま自分の頬を打つ者を見る。

「そうですよ。何でもまたこんな事に成ってるんですか？それより、どうして僕を呼ばなかったんですか？」声を低く押さえてはいたが、正巳は怒っている。

「呼ばないのにあなたは来たの？」彼の怒りをからかうように言った。

「梶さんが呼びに来てくれましたよ」呆れたように正巳が言った。

「だったら呼んだのと一緒じゃない」

「そうじゃないですよ。電話を一本くれてたら、こんな事に成る前に此処へ来れたんです。もう一分遅かったら……」

「私、また、死に損なったのね」どこかでそれを残念に思っていた。

「めぐみさん。どうしてそんなに死に急ぐんですか？僕は嫌ですよ。梶さんを失って、めぐみさんまで失うなんて、あんまりです」正巳はそう言って私の体を抱き締めた。

私が吉野に言ったのと同じ言葉を正巳が私に言っている。

「正巳、苦しいってば。ちょっと力を緩めて」正巳の強い思いが少し辛かった。

「嫌ですよ。力を緩めたらめぐみさんがそのままどこかへ行ってしまう」

「私は忍者じゃないわよ」冗談でごまかした。

「僕は今日忍者ですよ。梶さんに言われて此処へ着いたのが遅すぎたから、玄関から入れなかったんです。それで仕方なく忍び込んで来たんですよ」器用な奴だ。

「小さい頃からの修行が役に立ったわね」私は意識で微笑んで見せる。

「本当に勝手な人だ。梶さんと一緒ですね」彼の怒りは大分おさまっていた。

「あんなに勝手じゃないわよ。でも、吉野はどうしたの？」確か、私は吉野に首を絞められていたはずだ。

「すみません。ちょっと一撃を食らわせてしまったので、気を失ってます。でも気が付くと大変です。僕にはちゃんと払えなかったから……。だから気づく前に此処から逃げた方が良い」残念そうに言った。

「やっぱり春樹を降ろすしか無いのかしら？」私はそこから逃げる気にはなれなかった。

「めぐみさんにですか？僕にですか？」正巳が問う。

「いいえ、吉野によ。春樹が多分降りられるって言ったの。でも、吉野が嫌だって……」

私は迷っていた。きっと吉野は後で怒るに決まっている。何故なら、春樹に言わせると二人は恋敵どうしなのだ。

「今なら、気を失ってるから大丈夫ですよ」正巳が軽い調子でそう言った。

私も覚悟を決めて、闇の中で春樹の名を呼ぶ。「春樹、吉野に降りて」

暫くして、部屋の隅の方でウーッとうなり声がした。

「姉さん。こっちへは来るな。五十嵐はしっかりと姉さんを抱いて居てくれ」掠れ気味の苦しそうな声だった。

「どうしたの？うまく降りられないの？」私は心配になって尋ねる。

「いや、そうじゃない。今、旦那の中で悪霊と同居中。これをどう処理するかが問題だ」

「春樹。愛して。お願いだから戦わないで」私はそう言って正巳の腕を振り解き、春樹の元へ這い寄る。そして春樹の降りた吉野の体を抱き寄せる。

「めぐみさん駄目だって！」正巳が私の体を春樹から引き離そうとする。

「良いのよ、正巳。春樹も吉野も悪霊もみんな同じものなんだから」私はそう言ってしっかりと、硬直した吉野の体を抱き締めた。私の腕の中で彼の筋肉が蠢くのを感じた。

「ねえ、春樹。悪霊はどうして欲しいのかしら？」私は何故か自分でも信じられない程落ち着いていた。

「自分の存在を知らせたいって思ってるみたいだ」春樹が切れ切れの声でそう言った。

私は彼を抱き締めたまま、いとおしむ。

「お願い、戦わないで」私はもう一度そう言った。

「ええさんめだ」春樹がそう言って体の硬直が解けた。

一呼吸あって、彼の腕がもう一度悪霊の意志で私の首を締める。私はそのまま彼の背中に腕を回して力いっぱい抱き締める。愛おしむように彼の背中に指を這わせて、心で語る。

『すべては我の中に在り』

首を絞めて居た力が緩んだ。

私はもう一度心で語る。

『すべては我の中に在り 我は此処に在り』

吉野の体が力無く崩れ落ちた。

「正巳。ちょっと、これ、どけてくれない」正巳に言う。

正巳は音もなく這い寄ると、私の上に被さっている吉野の体を引っぱり降ろす。

「どうも、ありがとう」私は締められていた首を摩りながら礼を言った。

「めぐみさん。どうやったんですか？」正巳が尋ねる。

「さあ？良く判らないわ。とにかく吉野を布団に寝かせた方が良いわね」

「大丈夫だ。俺の意志で動ける」春樹がそう言ってむっくりと起き上がる。

「ご苦労様。どうもありがとう」私が言う。

「姉さんこそ。それに五十嵐も良く来てくれた。助かったよ。有り難う」

「梶さん、出来ればもう少し早く教えてもらえませんか？」正巳が文句を言う。

「悪い悪い。でも、一番良いタイミングで着いたじゃないか」

「僕にはスリルが強すぎますよ。部屋に入った時にはもうめぐみさんは仮死状態だったんですから。御魂繋ぎでやっと引き戻せたんですよ」

「だから言葉を持って帰れたのよ。あそこで一度死んで無かったら、こんなに巧く行かなかったの」私が言う。

「めぐみさん、そんな事してたら、命がいくつあっても足りませんよ」

「心配してくれて有り難う。あなたも私を殺してくれなかったし、吉野も殺してくれなかった。私、一体誰に殺して貰えば良いのかしら？」

「俺が殺してやるよ。何時かきつとな」春樹が言った。

「そう。それが一番良いかもね」私も言う。

「だから、俺が殺すまでは生きて居てくれ」春樹が念を押すようにそう言った。

「そうですね。それが一番良い」正巳が言った。

「ところで春樹、その体の居心地はどう？」

「初めから自分のだったみたいだ。なかなか良い感じだぜ」

「そう。だったら、あなたの知恵と経験で、吉野の問題を解決してあげれば？」

「姉さん。それはちょっと旦那に申し訳ないと思うぜ。確かに、男女の問題のもつれは俺の得意分野だが、本人がやりたくって引き寄せたのに、それを横取りしたんじゃ可哀想だ」

確かに春樹なら、簡単に解決するだろう。それよりも、まずそんな問題になんて成らなかつたはずだ。

「そうね。彼の問題は彼が解決する。それを彼が楽しめば一番良いけど・・・」

「楽しめるさ。その為に姉さんが居るんだから」春樹が笑いながら言った。

「脳天気な私が役に立つか・・・」諦めムードで言った。

「そう言う事ですね」正巳がそう言って私の頭を掴んだ。

「ねえ、春樹。あなたのせいで、この子までこんな事をするように成っちゃったのよ。何とか言ってよ」春樹に文句を言う。

「五十嵐。そうやって掴んだ後、ちょっと揺すってやってくれ。中でカラカラ音がしたら当たりだ」

「あのねえ・・・」

極度の緊張を解するように三人で笑った。

「ところでさっきのは何だったの？何が憑いていたの？」

「悪霊じゃ無かったですね」正巳が言った。

「ああ、あの時はとっさに悪霊って言ったが、あれは霊と言うより神だ」春樹が言う。

「神って？」私が尋ねる。

「此処に奉られて居た神の残存記憶」春樹が答えた。

「そうですね。十種の神宝を自分の物だって言ってました。だから、それで自分は祓え無いてっ」

「それはそうだろう。此処の神は大神神社から移されたものだ」

「そうだったんですか。だったら石上の宝は自分の物ですね。僕もそうじゃないかと思って名前を呼んでみたんです。でも、どれも本当の名前じゃなかったみたいで、決定打に成らなかつた」

「名前の呪術？」私が尋ねる。

「そうです。とにかく十種の神宝を自分の物だと言う限り、大神の関係だと思って、縁の名前を呼んでみたんです」

「歳の神 フルの神 物の主 確かそう言ってたわね」夢の中でそれを聞いたような記憶がある。

「はい。大歳、フル御霊、大物主です」

「天照国照彦天火明櫛甕玉饒速日命。これが名前の全部だ」春樹が言った。

「そんなに沢山言わないといけないの？」私が呆れて言う。

「名前だからな。でも、名前では落ちなかつただろう」

「何故ですか？」正巳が尋ねた。

「沢山の名前で呼ばれ過ぎて居るんだ。あまりにも強力だったので、普通の方法では封じられなくて、沢山名前を与えると言う方法で、力を分解して封じられた神なんだ。しかし、いろんな学者の説によってそれが繋ぎ合わされつつある。それで最近それが少し緩んでいたんだらうな。そこに姉さんだ。出雲の神の出張所みたいな姉さんがやって来た」

「出雲と仲が悪いの？」

「いや。ニギハヤヒは出雲の出だ。けど、元大和の大王でも在る。大和を守る意志が強い。そして残っている思いが大和を守る意志。そこが怨霊と人の違い。総合的にものが考えられないんだ」

「じゃあ、何故落ちたんですか？それ程強い神なのに」正巳が尋ねる。

「愛だよ。最終的にはそれしか無いんだ。それと、姉さんが向こうの世界から持ち帰った神の言葉」

「すべては我の中に在り 我は此処に在り」私が言う。

「それだ。ニギハヤヒの祀っていた神の言葉」

「そうか。今は神として祀られているけれど、元々は神を祀っていたのね。それが元来王の仕事だったんだ・・・」

「そう言う事。だから事代主の言葉は今祀られて居る元王だった神に届く」

「なんだかややこしいわね。でも、これで終わったのかしら？」私が言う。

「分からない。取り敢えず今夜はこれで休めるだろう。しかし、相手が神である限り、もう暫くは付き合う必要があるだろうな。五十嵐は姉さんから目を離すな」

「分かりました」正巳が答えた。

「なんだか困った事になったわね。これじゃあ立場が逆転ね」私が言う。

「違うよ。五十嵐がそれを必要としているんだ。まだ、五十嵐は神と対峙した事が無い。それを学ぶ必要が在るんだよ」春樹が言った。

「そうです。僕はずっと親父や梶さんに守られていたから、頭でっかちなだけで、本当の僕の持っている力の意味が判って無いんです。親父を葬った時にそれに気づきました。それをめぐみさんに手伝って貰って、一つずつ学ばないといけない」

「なんだか、可愛そうね」私が心からそう言った。

「こんな風に生まれついた者の宿命です」

「普通には生きられないの？」

「めぐみさんは普通に生きてますか？」正巳が言った。

「分かってるわよ。人それぞれ役割が在るんでしょう？でもね、私の可愛い正巳君が危険な目に遭うのは辛いよ」どうしても六歳の愛らしい正巳を思ってしまう。

「ありがとうございます」

「仕方ないさ。昔自分の命と引き換えに産み落とした子だからな」春樹が言った。

「そうだったんですか・・・」驚いたように正巳が言う。

「それを不注意で死なせてしまったのが父親だったその時の春樹よ。それでその後、自暴自棄だったっけ？」私はからかうように言った。

「それを言うな。ずっと隠し通して来たんだ。恥ずかしいからな」

「梶さん。それで僕の事ずっと可愛がってくれたんですか・・・」

「五十嵐、それは違う。俺は今のお前を愛していただけだ。五十嵐正巳としてな。姉さんだってそうなんだぜ。今のお前を心配しているんだ。前世の事はただのきっかけでしか無い。確かに感情はそれに沿ったものに成るが、それに縛られる必要は無いんだ」

「だったら、僕がめぐみさんを女性として愛しても良いんですね」

「もちろんだ。お前にはちゃんとるゐと言う母親が居るじゃないか。母は一人で良い」

「良かった」暗闇の中で正巳の気配が微笑んだ。

「ねえ、そろそろ吉野を呼び戻した方が良いと思うんだけど」私が言う。

「良いじゃないか。この体のまま俺と寝よう」春樹が言った。

「あなたねえ、吉野は今大きな問題の真っ只中で足掻いて居るのよ。それも死ぬの生きるのって言いながら・・・」

「分かった分かった。でも、姉さん。旦那は今夜の事みんな知ってるぜ。眠ってる訳じゃないからな」

「やっぱり、覚えてるんだ・・・。きっと怒るでしょうね。気を失ってる内に彼の同意も無くあなたを降ろしちゃったし・・・」

「僕帰りますね。後は頑張ってください。それと明日めぐみさんに携帯電話を届けますから、それをいつも持っていて下さいよ。僕は暫く大阪に居ますから、僕の携帯の番号も登録しておきます。じゃあ、頑張ってください！」正巳はそれだけ言うと本当に忍者のように帰って行った。

「現代の若者だわね！」私が言う。

「割とましな方は在るがな。さあ、俺も落としてくれ」

「ねえ、私一人で吉野の怒りを受け止めないといけないの？」

「仕方ないだろう？自分でした事の後始末ぐらい自分で出来るだろう？」

「確かに呼んだのは私だけど、あなたが降りたのよ」

「俺、姉さんの旦那、苦手なんだ」

「薄情者！もう良いわ。春樹、帰って」

長い沈黙があった。真っ暗な中で私は、膝を抱えて座り込み、心の目に映る吉野を見ていた。もう既に春樹の姿ではない。つまり、吉野が黙っているだけなのだ。沈黙に耐え兼ねて私が言う

。「聡二郎さん、ごめんなさい。仕方なかったのよ」

「めぐみ。君達はいったい何をしようとしてるんだ？」感情を抑えた静かな声だった。

「さあ？私にも判らない。ただ、成り行きに任せてるだけ」一番正直な答えだ。

「僕を巻き込むのはやめてくれ」静かな口調だったが、確かに吉野は怒っている。

「本当にごめんなさい。もう、しないから。本当にあなたには申し訳ないって思ってるの」

「めぐみはいつからそんな風に成ってしまったんだろう？」ため息交じりにそう言った。

「本当にごめんなさい。他に何も言えないわ」

吉野が立ち上がって部屋の灯りを点ける。私は眩しくて目を細めながら、浴衣の崩れを直す。そして、ちゃんと正座して、畳に両手をついて謝った。

「本当にごめんなさい」

吉野がそれを見て笑う。「めぐみらしくないな。でも、たまには良いか・・・」

私はほっとして顔を上げた。それを見て吉野が驚いた。

「めぐみ、その首・・・」

「ああ、また痣になっちゃった？みんなで寄ってたかって私の首を絞めて殺そうとするのよ。大丈夫、スカーフを持つからそれを巻いて隠すわ」

「僕が締めたのかい？」

「あなたに取り憑いた悪霊が締めたのよ。それより、あなたどこも痛くない？正巳がちょっと乱暴な事したはずなんだけど・・・」

「大丈夫みただよ」彼は体を動かしながらそう言った。

「エネルギーの衝撃だったから、気を失っただけなのね。良かったわ」

吉野が私の傍に来て抱き寄せて言う。

「めぐみ、僕の方こそ悪かった。君を殺そうってどこかで思ってたからこんな事に成ってしまっ

たんだ」

「違うわよ。あなたはもう私を殺そうって思ってなかった。あれはあなたじゃないの。だから気にする必要なんて何も無いのよ。それより、春樹を降ろしてしまった事、本当にごめんなさい」
「仕方なかったんだろう？梶君を降ろさなければ、今頃君は死んでた。僕が殺人犯に成ってたって事じゃないのか？」

「分からないわ。自分が死んだ後なんて何も考えて無かったもの。でも、一度死んでみたいだけ。正巳が呼び戻してくれたの」

「五十嵐君は何故此処に来たの？君が知らせたの？」

「いいえ、私は何も知らせてない。春樹に呼ばれたって言ってたわ。あの子は子供の頃から修験道の修行をしてきてるから、忍者みたいなものなのよ。それで空気みたいに忍び込んで来て、また消えちゃった」

「僕の知らない世界だね」

「あなたが必要としないから持って来なかった世界よ。あなたは一般的に言われてる現実を精一杯生きようと思って生まれて来た。多分、私がどんなに奇妙な世界に首を突っ込んでも、普通の世界から私を愛してくれるのよ」

「君は何故そんなに僕の愛を信じられるんだい？僕が君を本当に愛しているかどうかなんて君には分からないのに」

「あなたが私の乗ったハシゴを支えていたんでしょう？ニコニコ笑う龍を見上げながら。それだけで充分なのよ。あなたが私と地面と繋がってくれた。それを私は半分死んでいた時に見て来たの」背中に吉野の暖かさを感じながら言った。

「良く分からない。でも、確かに僕は君を愛しているよ。確かな事と言ったらそれだけだ。他には何も判らないけど、それはそれで良いような気になってる。それに、悔しいけど、梶君が君を本当に強く愛しているのも判ってしまった。あんな風に人を愛せるんだって、ちょっとびっくりしてる。あと、五十嵐君が君に愛の告白をしているのも聞いてしまった」

「激戦区？」私が笑って言う。

「そうみたいだね。でも、今は僕しかいない。此処にいるのは僕とめぐみだけだ。君を抱いても良いだろうか？」彼が耳元でそう言った。

私は振り返って、それに口づけで答える。そして彼の背中に腕を回し、抱き締めて言う。「愛してる」それは愛のお呪い。誰もが知らずに使っている一番簡単で、一番効果のあるお呪い。

その時もそのお呪いは効果を発揮して、私の中に柔らかく暖かく心地良いものがいっぱいに広がった。

空を飛んでいるような不思議な視点から、藤の花を見ている。大きな木に絡み付く藤蔓に、いくつもの薄紫の花が下がっている。その一つが奇妙な形をしていた。色も少し違う。

灰色に曇った空の下、真っ黒いカラスが木の枝に止まり、その花を啄む。

それは花ではなかった。蔓で編まれた籠。そして、その中にあるのは死体。

それに気づくと同時に藤の花は消え失せた。そこにあるのは籠に入れられ、ぶら下げられた死体だけ。

一人の男が泣いていた。自分の手を見ながらオーオーと声を上げて。

白い麻で織られた衣装に身を包み、腰には鉄剣を下げている。髪をみずらに結び、顔には入れ墨があった。

「それは我らが神ではない。神は既に帰られたのだ」

後から同じような姿の男がやって来て、泣いている男に言った。

「いや、女は我の元に戻った。これは我が女だ」そう言って男はまた泣き続ける。

「そうではない。これは神の抜け殻。汚らわしきもの。さあ、もう山を下りるのだ。汚れが移る」

「嫌だ。我が女が鳥に食われてしまう」

「汝はまた、新しき神を担うのだ。汚れてはならぬ」

「兄者は、悲しくないのか？愛しき女がこの様な姿になって」

二人は兄弟のようだ。

「悲しくはないさ。我が女は神であったのだ。神はまたすぐに我が元に戻る。一つの言葉を告げる毎に神は体を捨てるのじゃ。そしてまた新しい体で戻って来る。汚れてはなるまいぞ。新しき神に仕えるためにも」

「我が女はまた戻るのか？我はまた愛しき女に会えるのか？」

「おうさ。会えるとも。また我らが新しき神を担うのじゃ」

一つの言葉が一つの死。

何も思いを持たぬ神が、彼らにとって愛しき女。あの二人は、ただ神を愛して居ただけなのだ。神には思いなど何も無いにも関わらず、彼らは神を愛していた。

目覚めた時、私は汗をぐっしょりかいていた。

奈良での夜が明け、吉野は車で私を送り、私の新しい部屋でコーヒーを飲みながら『めぐみ、もう心配要らないから。君達の不思議な戦いを見て、悩んでいる自分が馬鹿らしくなった』と言って帰って行った。

正巳はその夜『約束の物です』と言って携帯電話を届けると、用があると行ってそのまま帰って行った。

私は疲れていた。前夜悪霊に殺されかけたのだ。無理も無い事だった。

あり合わせの物で夕食を済ませ、片付けもそこそこに、簡単にシャワーを浴びて、ベッドに入

った。すぐに、深い谷に引きずりおろされるような、唐突で深い眠りが私を捕らえた。

そして、汗をかいて一度目覚めたのだ。確かに目は覚めていた。しかし、体が重くて思うように動けなかった。金縛りとは違う。動かそうと思えば動かせるのだ。それでも、それはいつもの何倍もの力を要した。窓から見える外はまだ暗かった。薄闇の中で自分の部屋が奇妙に蠢いていた。

私は着替えたかった。汗に濡れたパジャマがあまりにも不快だった。

だるく重い体を騙しながら、何とか着ているものを脱ぎ、タンスの中から新しいパジャマを引っ張り出す。ズボンに足をいれ、上着に袖を通し、ボタンを留めた。そこまでで私は力尽きた。

そのままもう一度ベッドに倒れ込む。

目の前に、籠に入れられた自分の死体をカラスが啄む夢がもう一度広がった。

『嫌だ嫌だ、それはさっき見たから、もう良いよ。もうその夢は見たくない』私はそう思いながらまた奇妙な夢の中に入って行った。

「お前、何故此処へ来た？」

髭面で赤ら顔の立派な体格の男が私の顔をのぞき込みながら言った。目の前には原始の森が広がっている。そして、私は白木で造られた社の縁に腰掛けていた。

「あなた、誰？」私が尋ねる。

「フツシ」男が答えた。

「嘘〜〜〜！フツシって、あのヨーコが根の国で会ったフツシ？」それは龍の物語。

「ヨーコを知っているのか？」男が驚いたように言った。

「私が書いたのよ。ヨーコもエディも私の想像上の人物よ」

「そうか、お前が書いたのか。あの後あいつらはどうしてるんだ？」

彼にとってそれは物語であろうと現実であろうと関係ないような言い方だった。

「まだ、出雲へはたどり着いて無いわ。私は何度も行ったけど」

「そうか、まだ封印は解けないのか」残念そうに首を振ってそう言った。

「待っているの？」

「ああ、俺も生まれ変わりたい」遠くを見るようにしてそう言った。

「あなたは名前を捨てて、生まれ変わっていたのよ。何度も何度も生まれ変わって、そして、エディもあなただった」

「いや、それだけじゃない。フツシとして生まれ変わりたいのだ。俺は此処で神だった。神としてもう一度この名で祀られたい」

「フツシはスサノオだったのよね」

「須佐の王だ」

「私、昨日ニギハヤヒにあったわ」

「ハヤヒだ。子供の頃はオオトシと言った。大和のヒメを娶って和睦を結びニギハヤヒと呼ばれた」

「あなたの息子？」

「ああ、そうだ。奴はどうしてた？」

「私の首を絞めて殺そうとしたの」

「何故お前を殺そうとした？」

「さあ？私が大和を取ろうとしてるって思ったみたい」

「御霊が汚れたか？」

「御霊が汚れるとどうなるの？」

「崇る」

「だったらそうかも知れない。でも、何故崇り神になったのかしら？」

「あいつはそんな奴では無かったがな。酒と女が好きな、良き男だった。女を殺すような卑劣な奴では無かった」

「きっと嫌な事が一杯あったのよ。そう言えば春樹が、沢山の名前に分けて祀られて、分解して封じ込められてるって言ってたわ」

「そうか、卑劣な手を使ったものだ。名は神聖なる物。名を変えて封じられた者は元の名を取り戻す事によって解かれる。しかし、分けられた物はすべてを集めなくてはならない。一つでも欠けると元には戻れない」

「そう言う事だったの……。可哀想に」

「ところでお前の名は？」フツシは、私の顔を覗き込むようにしてそう言った。

「私はめぐみ」

「もう一人は？」

「えっ、もう一人って？」

「俺、梶春樹」驚いたことに、春樹は私の中に居た。

「どうして、夢の中まであなたが居るの？」私は春樹に尋ねる。

「姉さんが夢だって知ってるからだよ。こう言うのを自在夢って言うんだ。自分の意識を持ったまま夢を見る。要するに夢だと自覚しながら夢を見るって言う事だ」

「お前、ハヤヒに似てる。ハヤヒが何れかの名で生まれ変わったか」フツシが言った。

「そうかも知れないな。だったら俺が姉さんを殺しかけたって言う事か？」

「あなたならやりかねないわね。どうせなら、ちゃんと殺してくれれば良かったのに」

「姉さん。いつか殺してやるって約束したろう？急ぐな」

「命か……。エディとヨーコも、仲が良かった。それにお前達も……」

「フツシはナダヒメとまだ会えないの？」フツシが会いたがっていたのはナダヒメとハハだった

。

「ああ、まだ此処に縛られたままだ。龍は現れるようになったがな」そう言ってフツシは右手を空に向けて伸ばし、それで円を描くようにして、龍を呼んだ。

そこに現れた龍を見て、春樹が言う。「姉さん。あいつだ！」

「あなたがフツシの龍だったの。出雲では出迎えてくれてどうもありがとう」私はその龍に語りかける。すると龍はまた首を上下に振って笑って見せた。その上、私に向かってウインクまでしてくれた。

「あーあ。姉さん。俺嫌だ。龍の奴ウインクまでしたぜ」春樹が嘆く。

「良いじゃないの、お茶目でかわいくって」

「それで、お前達は何しに来たんだ」フツシが言う。

「私には何も分からないの。春樹はわかる？」

「姉さんに分からないものは俺にも分からない」春樹が答えた。

「此処は、命ある者の来る場所ではない」フツシが言った。

「おいっ、姉さん。それ、やばいぜ。姉さんの命が無くなってると言う事だ」春樹は思いっきり慌ててそう言った。

「そうか、私の体が死にかかっている訳だ。それでさっきあんなにだるかったのね。結構色々あっ

たし、心臓麻痺でも起こしたのかしら？」

「姉さん。何落ち着いてるんだ。そう言う場合じゃないだろう？体に戻らないと」

「いいわよ、もう。吉野ももう大丈夫だって言って帰ったし、正巳だってあそこまで成長したら後は一人でやれるわ。育てなきゃいけない子供が居る訳でも無いし、どうしてもやりたい仕事がある訳でも無い。このまま死んでしまえたら何も苦しまないですむわけだし」

「何馬鹿な事言ってるんだよ。それよりフツシ、此処から姉さんに戻さないと物語は続かないんだぞ。エディもヨーコも固まったまま先に進まないんだ。フツシが一番困るんじゃないか？」

「それは困る。けど、俺は此処から出るすべを知らない。出られるものなら俺が出てる」

「それもそうか・・・」春樹が納得する。

「もう、良いじゃない。楽しい人生だったわ。あなたと出会えてとっても幸せだった」

「何故姉さんはそんなに死にたいんだ？」

「多分、言葉を降ろしたからじゃないかしら？」

「どう言う事？」

「私さっきまで見ていた夢で知ったんだけど、事代主って一つ言葉を降ろすと命を捨てたみたいよ。新しい言葉は新しい体の神が降ろすの。私、二つも降ろしちゃったじゃない。それで死ななきゃならないんだと思う」

「どんな言葉を降ろしたんだ？」フツシが尋ねる。

「すべては我の中に在り 我は此処に在り」

フツシが息をのむ。「それをお前が降ろしたのか？」私は頷く。

フツシが素早い身のこなしで縁を降りると、地面にひれ伏して言った。

「我が神よ。恵み給え 幸え給え」

「ねえ、どうしたの？何なのよ」

「めぐみさん！めぐみさん！」

「めぐみ！めぐみ！」

正巳と吉野の声が私を呼んでいた。

「どうしたの？何なのよ？」私は訳が分からずそう口走った。

「戻った！」正巳の声が耳元でした。

「めぐみ！」吉野の声だった。

私は重だるい瞼を必死でこじ開けて声のする方を見る。

ぼんやりと見えたのは自分の部屋と、吉野と、正巳だった。

「めぐみさん。いい加減にして下さいよ。どうしてあなたはそうやって心配ばかりかけるんですか？」正巳が真剣な顔で怒っていた。

「五十嵐君。そんなに怒らないでやって。めぐみもわざとじゃないんだし」吉野が私を庇っている。

『私、どうしちゃったの？』声に出せない。

「めぐみさん。喋らないで良いですよ。僕には分かるから。とにかく、丸一日眠ったままだったんですよ。それも、仮死状態で。いくら電話しても出ないし、せっかく携帯を持たせたのに連絡が取れなくて、一時間前に仕方なく此処へ来てみたらこんなことになってたって訳です。吉野さんだって、心配して駆けつけてくれたんですよ。大体、こんな時に何故梶さんが居ないんで

すか？」

『春樹も一緒に行ってたの』私が言う。

「魂が時間と空間に縛られないのは知ってるでしょう？」

『特殊な場所に居たのよ』

「とにかく元気になってからちゃんと説明して貰いますからね。それより、喉渴いて無いで
すか？」

『渴いてる。でも飲めるかどうか分からない』

「大丈夫ですよ。また御魂繋ぎで呼び戻したんですから。こう毎日じゃ術も効かなくなる」

「ほら、五十嵐君、そんなに怒らないで。めぐみ、少しかから飲みなさい」

吉野がそっと頭を抱えると、コップの水を含ませてくれた。私はそれが巧く飲めないでむせ
返る。

「ゆっくり、そっと飲むんだよ。巧くできなかつたら、また入院だ」吉野が言った。

私は首を振って見せてもう一度コップに口をつける。今度は巧く飲めた。

「巧い巧い」吉野がそう言ってそっと頭を降ろす。

「今度は一日で良かった。前の時は三日だったからね」

「これって祟り？」私はやっと声に出して言う。

「めぐみさんがあんまり死にたがるからですよ」正巳が言った。

「誰が此処へ入れてくれたの？」

「僕が忍び込んだんですよ。でも、めぐみさん。ちゃんと窓のカギをかけて寝るようにして下さいよ。今回は壊さなくてすんだから助かったけど……。本当にその内僕は犯罪者だ」

「ごめんなさい。まさかこんな事になるなんて思ってもみなかったから。とにかく疲れて、体が
だるくって、一度寝汗をかいて着替えたのよ。かなりだるかったけど、命に関わるなんて思いも
しなかった」

「だから、そんなに死にたがるから罰が当たったんですって」

「正巳。ちょっとエネルギーを頂戴。スターターを回したいの」

「良いですよ」正巳はそう言って、ベッドで寝ている私に被さるようにして、そっと抱き締め「
愛してる」と言った。私も心の中で『愛してる』と言う。

呪文の効果によって流れ込む正巳のエネルギーに意識を合わせ、自分のエネルギーを発電する
。もちろんそれはイメージの世界だ。しかし、そのイメージは確実に私に元気をもたらせた。

「ありがとう。もう大丈夫よ」私がそう言うと、正巳が私から離れた。

「君達は一体どんなふうな構造をしているんだろう？」吉野が不思議そうに言った。

「良いじゃない。とにかく、これで大丈夫よ」私はそう言ってそっと自分の力で起き上がった。
正巳はそれを見て笑う。

「本当に梶さんが言ったとおりだ。めぐみさんはちゃんと自分で発電してる」

「バッテリーが上がると誰かにかけて貰わないといけないけどね」

「めぐみさんのエネルギーが無いと梶さんもないんですね」

「それはそうよ。彼は私のエネルギーに寄生してる訳だから」

「梶さんが聞いたら怒るでしょうね」

「多分、まだ帰って来ないと思うわ。今のうちに悪口をいっぱい言っておきましょう」

「めぐみ、何か食べたいものは無い？」吉野が言った。

「アイスクリーム」私が答える。

「君は熱を出すといつもアイスクリームが食べたいんだね。苺のがいいんだよね」

私は頷く。

「買って来るよ」吉野はそう言って出て行った。

「何があったんですか？」正巳が尋ねる。

「違う次元に引き込まれたみたい」

「次元を越えたんですか？」

「ええ、初めは時を越えただけだったの。そこで一度目が覚めて、やっとの思いで着替えた。その後、もう一度そこへ引き込まれそうになったから嫌だって言ったら、違う次元、それも私が物語りで作り出した別の空間に入ってしまった。春樹は自在夢だって言ってた」

「梶さんも一緒だったんですか」

「ええ、私もびっくりしたのよ。夢だって自覚してるのに、彼が私の中に居るの。そこでスサノオに会った」

「やっぱり神ですか。相手が神なら、そのぐらいで済んで良かった。でも、めぐみさん。本当にもう少し命に執着して下さい。そうでないと呼び戻すのも大変なんです。いくら術を使っても、本人がそれに答えないと物凄く大変なんですから。今回はもうだめかと思いましたよ」

「今回も神の言葉が私を助けたみたいよ。神の言葉を告げたとたん、スサノオがひれ伏して私を拝んだの。それで気が付いたらこっちへ戻ってた」

「姉さんは戻りたくなかったのにな」春樹が言った。

「あなたも戻れたの？置いて来ちゃったかと思った」私が言う。

「どうせ、俺は寄生虫みたいなものだからな」春樹が言った。

「聞いてたんですね」正巳が笑う。

「そうだよ。喋るまでのエネルギーはまだ無かったんだ」

「でも、良かった」

「もう一度奈良へ行く必要があるな。それまで姉さんは体を元気にして、五十嵐は神について調べて置くこと」

「分かりました」正巳が言った。

「あっ、旦那が帰って来た。俺は知らん顔な」春樹がそう言って気配を消した。

「梶さんは本当に、完璧に消してしまいますね」正巳が言う。

「私には分からないのよ。喋らなければいい男なのよね・・・」

「めぐみアイスクリーム買って来たよ」吉野がそう言って戻って来た。

私は喜んでそれを食べる。

「元気そうになりました。三十分前とは別人だ。もう、大丈夫そうだから、僕は帰りますね。後は吉野さん、お願いします」正巳はそう言って立ち上がる。

「本当にありがとう。私もちょっと反省するわ。何か執着できるものでも探す」

「出来れば僕に執着して下さい」正巳はそう言い置いて帰って行った。

「不思議な青年だ」吉野がぼそっと言った。

「あれでもうすぐ三十歳よ。それに、メモリーコーポレーションの社長」

「そうだね。大したものだ」

「あなたにもまた迷惑をかけちゃったわね。私の事どころじゃなかったでしょうに」

「大丈夫さ。死ぬのを諦めたら、結構気が楽になったよ。それに、君が言ったように憎まれるた

めに生きているって言うのも良いような気がしてね。取り敢えず彼女の所へも行って来た。まだ、僕の事は良く分からないみたいだったけど、付き添ってられたご両親にもちゃんと謝ったから」

「大変だったでしょう？」

「ちょっとね。でも、少しずつ回復してるらしいから」

「そう。良かったわ」

「今夜、此処に泊まっても良いかい？」

「別に構わないけど、私ならもう大丈夫よ」

「でも、心配なんだ。向こうのソファで寝るから。それに洗濯もして置いてあげるよ」

「助かるわ。ありがとう。じゃあ、お願いしようかな」

「任せて。一人暮らしで慣れてるんだ。前の妻に男が出来てからずっと一人で生活してたんだ」

「それは可哀そうね。早くいい人を見つけた方が良いわよ」

「大丈夫。自分で何でも出来るから」

「じゃあ、別れた奥さんに感謝した方が良いわよ。自立させてくれたって言う事だから」

「それもそうだね。めぐみ、ありがとう」吉野はそう言って笑った。

「どう致しまして。でも、あなたの場合、自分の事だけじゃなくて私の面倒までみられるのよね。完璧だわ」

「お褒めに与りまして光栄です」

何の蟠りも無く二人で笑い合う。これが私達の十五年間の歴史なのだろうか？だとしたら、やはり私は何も間違っていなかったと言う事だ。

「もう少し寝てると良いよ」吉野が言った。

「ありがとう、そうする」私はそう言ってもう一度横になる。

「後で雑炊でも作ってあげるよ。出来たら起こしてあげるから」

「うん」私はそう言って目を閉じた。

吉野が流し台で洗い物をする音を聞きながら、考える。どうも私は本当に死にたがっているようだ。いや、正確には誰かによって死を与えて貰いたがっている。自分で死にたいとは思わない。しかし、誰かが殺してくれるのを待ち望んでいる。

正巳が怒るのも無理は無い。そんな私を彼は二度も呼び戻したのだ。それも薄っぺらな幻としてではなく、元々の私のままに。多分、鬼であった時の失敗を彼は克服しようとして、私のそばに居たと言う事だろう。ならば、私も彼の役に立ったのだ。それに関してはそう思っておこう。しかし、私自身何とかしなければならぬ。何かに執着するとは言ったものの、本当に執着出来るものが見つからない。

『龍よ、教えて』私は心の中で龍に問う。

『君が君で居る事に執着すると良いよ』久しぶりに龍が答えた。

『良く判らない』

『死にたがる君が、本来の君でない事を自覚すれば良いんだよ』

『そうか、そうよね。私はそんなに死にたがる人間じゃないものね。高い所が怖かったり、病気じゃないかって心配するような、気の小さい人間だもの。それって、死にたくないって言う事だものね。それをそのまま認めて愛おしめば良いんだ』

『それで良いよ。誰かが君を殺そうとしたら、取り敢えず抵抗してみる。恐怖を感じるんじゃない、自分は生きる必要があるって思うんだ。誰の為でも無く、自分にとって生きる必要がある

。そう思えば恐怖ではなく、生きる為の力が出てくる。それだと、相手に恐怖のエネルギーを与えないですむからね』

『そうか、誰の為にもならないから死んでも良いって思うのって、幻に幻を映そうとしているのと同じ事だったんだ』

『そうだね。誰かの為に生きて居るって思うのと、別に自分が居なくても大丈夫だから死んでも良いって思うのは、同じだね』

『どうもありがとう。生きる為に生まれて来たんだって思う練習をしてみるわ』

『実戦でしたりしないでね。きっと正巳君がまた怒ると思うから』

『判ったわ、シュミレーションだけにしておく』

私はそう思ったところで、いつもの体を休める為の眠りに落ちた。

二度目に死にかけてから一週間。私はゆっくりと体を休めた。仕事も急ぐものが無かったので、じっくりと時間をかけて仕上げられた。多分、それも神の裁量だろう。大体、疲れて居る時には、とんでもないミスをしでかすものなのだ。今回はそれだけでも時間をかけられる事によって免れたはずだ。

正巳は一日に何度も私の存在を確認するための電話をかけて来た。

「もしもし、めぐみさん。大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫よ」私が答える。

「だったら良いです。じゃあまた電話します」それだけで電話を切る。本当に変な奴。ちょっとぐらい何か話しても良いだろうに・・・。

そんな彼も昨日からまたセミナーの為に東京へ行っている。東京からでも同じように電話はかかって来ている。今回の出張は三日間だと言う事なので明後日には戻って来るだろう。

体調は始めの二、三日は少しふらつく事があったが、徐々に回復し、今はもう元に戻っている。

吉野は二日間此処に泊まって、休暇が終わったので自宅へ戻って仕事へ行っている。吉野にとって何より良かったのは、社内恋愛であったにもかかわらず、彼女との事は誰にも知られていなかった事だ。だから、今のところ仕事を失う心配はなさそうだった。

彼は、私の体を気遣って仕事が終わると食べるものを買って届けてくれた。それも、もう昨日までで断った。そんなに甘えてばかりはいられない。体調はほぼ完璧になったのだから。

龍の言った『君が君で居る事に執着すると良いよ』と言う言葉を、何度も何度も心の中に沈め込む為に反芻する。

『私が私で居る事。私は私以外であり得ない。私は私のままで居て良い。私は私のまま生きる事を認める。私は生きて愛する事を選んだ。だから、生き続ける』

大体こんな感じだ。春樹は死んでも愛する事を止めないが、生きて愛する事は止めてしまった。私は生きて愛する事を選んだ。だから生きて居るのだ。誰もそれを邪魔出来ない。私がそれを完了と見なすまでは。

『よしっ。矢でも鉄砲でも持って来い！悪霊だろうと、神の残存記憶だろうと、私が生きようと思って居る限り、私の命を奪い取る事など出来ないんだ！！』

これで、正巳に怒られないで済むだろうか？今回は本当に彼には心配をかけてしまった。それに、彼の術の凄さも見せて貰った。彼にとってそれが必要だったとは言え、私なりに反省した。それが次に進む為に必要なプロセスだと言う事も私は理解していた。

首の痣も目立たなくなったので、私は久しぶりに買い物に出掛ける。今日からは自分で食べるものを作るのだ。

スーパーでレタスを選んで居る時に携帯が鳴った。

「もしもし」

「めぐみ？」吉野だった。

「どうしたの？」

「家に電話したら出なかったから」

「買い物に出て来たの」

「大丈夫かい？もう、ふらふらしたりしない？」

「ええ、平気よ」

「今夜、何を作るの？」

「まだ決めて無いわ」

「僕の分も頼めるかな？」

「良いわよ。随分お世話になっちゃったし、それぐらいお安い御用よ」

「じゃあ、いつもと同じぐらいの時間に行けると思うよ」

「分かった、じゃあ待ってるわ」

本当に不思議だ。何故、別れた夫がこんなに私を心配してくれるのだろうか？それも、かなりひどい状況の中で足掻いて居るはずの男なのに。

それなりに気を紛らわせて、自分の心のバランスを取って居るのだろうか。私はそう思って自分を納得させた。

今夜の夕食は彼の為に、ステーキを焼く事にした。随分世話になったのだ、少しぐらい奮発しなければ。それと、彼が好きだったポテトサラダと生ハムのオードブル。

久しぶりに二人分の食事を作ると言う事を単純に喜んでいた。幸せってそんなところにも落ちて居るのだと思うと、やっぱり生きて居る事がとても有り難い事のように思えた。

買い物を終えて部屋に戻るとすぐ、正巳からの電話が鳴った。

「めぐみさん。大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫。今、買い物からもどったところよ」

「一人で買い物に行ったんですか？」

「ええ、もう完ぺきよ。何があっても大丈夫」

「そうですか？」

「大丈夫だって」

「僕は明後日帰ります。それまでくれぐれも無理はしないで下さいよ」

「分かってるわよ。今夜も吉野が来てくれるって言ってたし。おとなしくしてますよ」

「それだったらいいけど……。それと、梶さんの宿題も大分解けてますので、帰ったらすぐに伺います」

「分かった。待ってるわ」

「本当に僕を待っててくれるんですか？」

「もちろんよ。だから仕事頑張りなさいよ」

「はい。あれからチャネルも巧く行ってます。今度また見て下さい。多分梶さんと同じぐらい綺麗に引き取れるように成ってますから」

「それは、良かった。あなたも一人前ね」

「それはまだ……。でも、すこしづつでもそれに近づこうと思ってますから」

「大丈夫よ。あなたなら立派な社長に成れるわ」

「ありがとうございます。じゃあ、明後日楽しみにしてます」彼はそう言って電話を切った。

珍しく喋ったわね。私はそう独り言を言って切れた電話をテーブルに置く。

『姉さんのエネルギーが戻ったからだよ』春樹の意志だった。

『そう、正巳には電話でもそれが分かるんだ』

『そう言う事。奴なりに気を遣ってたんだろ？』

『なんて良い子なのかしら？』

『俺が育てたんだ』

『何、偉そうに言ってるの。彼の持って生まれたのもよ』

『まあな。だからちょっと難しいところもあるが、良い男だって言っただろう？』

『確かにね』

『体の方は大丈夫そうだな』

『ええ、もう完璧よ』

『心の方も随分良い状態だ』

『そうかしら？』

『それなら戦える』

『私は戦わないわよ』

『そうだったな。言葉を間違えた。戦うんじゃないでなくて楽しむんだ』

『それならOKよ。あなたと正巳が居れば、どんな事でも楽しめるわ。でも、なるべく気持悪いのは嫌よ』

『相手が神だからな・・・』

『自信無いの？』

『そう言う訳じゃない。どうせ成るようにしか成らないんだから・・・。でも、俺、ちょっと後悔してる』

『後悔してるって？』

『俺、姉さんの普通の幸せをめちゃくちゃにしちまった』

私は大きな声で笑う。それもお腹を抱えて。久しぶりに心の底から笑った。そして、笑い過ぎて出た涙をふきながら春樹に言う。

『何故、御堂筋で再会した時にそれに気づけなかったのよ』

『まあな、そう言う事だよな。それをずっと姉さんは言い続けてたんだな・・・』

『本当にあなたって肝心のところがずれてるのよね。吉野と結婚するって言った時だって、止める、俺と結婚しようってちゃんと言ってたら、きっと全然違ったものに成ったはずなのに、あなたはそれも言えなかった。本当は私、期待してたのよ』

『そうだな。あの時、俺にはどうしても言えなかったんだよな・・・』

『死んでから気づいても後の祭りって本当ね』

『今更何を言っても死人の戯言か・・・』

『どうしたの？随分弱気ね』

『それでも無いけどな。ちょっと姉さんの負担に成り過ぎてたかなって思ったんだ』

『そうね。私のエネルギーに寄生してる訳だから』

『それだよ。ちょっと回復が遅れたのもそのせいだ。俺がちょっと使い過ぎた』

『何してたの？』

『調べ事』

『それで？分かったの？』

『ああ、大体な。かなり大変な仕事だって分かったよ』

『そう。でも、気にしないで。もう大丈夫だから。それに、必要の無い事はやって来ないんでしょ？私にも正巳にも必要だからやって来るのよ』

『まあな。そう言って貰えると気が楽になる』

『本当に変な幽霊ね』

『幽霊じゃ無いって言っただろう？』

『はいはい。あなたも早くいつものあなたに戻って下さいな』

『ああ、そうするよ。どうせこの道しか無いんだ。それが分かるだけ辛いかな』

『死んでも辛いか……。だったら、生きていて辛いのは仕方ないわね』

『そう言うな。姉さんの辛さは俺がちゃんと引き受けてやるから』

『それはどうも有り難う。愛してるわ』

『ああ、俺も、愛してるよ』

私は春樹と会話しながら、食事の用意を進めていた。途中で大笑いしてしまった時に、持っていたジャガイモを取り落としてしまったぐらいで、それは順調に進んだ。

吉野が来る時間の一時間前にはサラダとオードブルが出来上がり、それを冷蔵庫に入れる。後は彼の顔を見てからステーキを焼けば良い。

食事の用意を終えて、ソファで休む。

そう言えば、春樹がさっきおかしな事を言っていた。あいつは私のエネルギーを使って単独で何か調べものをしてらしい。良く判らない。一体どんな風になっているのだろうか？

『それな、姉さんが寝ている時に、記憶の底から探り出すんだよ』春樹が答えた。

『寝てる時？』

『そうさ。人の記憶って言うのはものすごい情報量を持っているんだ。その中から必要なものを探り出す。姉さんが過去に遡って神であった頃を見てきたのと同じだ。ただ、それを姉さんに自覚させずに、俺だけが見てきたって言う事』

『それで私あんなに眠ってばかりいたの？それと起きた後もずっとボーッとしていたのもそのせい？』

『ああ、そうだよ。姉さんの記憶に潜り込んで判ったんだけど、俺が生きて居た時に持って居た記憶って、本当に浅い部分だけだった。それも、自分に特定した狭い範囲のもの』

『それでも、あなたはそれを使って随分楽が出来たのよね』

『まあな。でも人の記憶って言うものは、もっと限りないものだったぜ。地球の成り立ちから、生命の成り立ち、それに魂の出来た意味まですべて刷り込まれていた』

『要するに遺伝子的に持って居る記憶ね』

『そうだ。それと同時に、社会的なすべての出来事まで入っている。社会現象って言うのは、すべての魂の共同作業によって進められて行くものだからな。それを言葉にして説明するのは困難だが、確かにそれが記憶の中に留められていた。要するに、情報用の言語と伝達用の言語が異なっているって言う事だな。取り敢えず俺は、今回必要な事だけ、姉さんの現実に翻訳して来た』

『何だか、とっても凄い事になって来たわね』

『でもな、結局みんな同じだけのものを持っているんだぜ。俺や姉さんが特別な訳じゃない。そ

れの方が俺には驚きだったよ。何も考えないで生きて居るような奴でも、結局同じだけの情報量を持って生まれて来ている』

『それはそうよ。だって同じものなんですもの。同じものの違う側面でしかないのよ。使う場所の違いだけよ』

『そうだよな。でも、つい自分が特別だって思ってしまうのが人というものだ』

『そうね。でも、そう思う事が自分であり続けるには必要なのよ』

『ありがとう姉さんがそれに気づいてくれた事で、これからの仕事が少し楽になる』

『龍に教えて貰ったのよ。今回の出来事で随分正巳に迷惑かけちゃったじゃない。私なりに反省したの。それで龍に尋ねたら、自分が自分である事に執着すれば良いって教えて貰った。そうすれば正巳に怒られないで済むって』

『そうか、それは良かった。五十嵐は自分の気持ちを表現するのが不器用だからな』

『それは仕方ないわよ。あの子は自分を表現する前に、相手の思っている事が判ってしまうんですもの。可哀相に・・・』

『それも、あいつが選んだ道だ』

『そうね。でも、私、少しは彼の役に立ってるのかしら？』

『ああ、五十嵐があそこまで成長したのは頼りない姉さんの存在があったからだよ』

『それはどうもありがとう』

微笑んだ春樹の感情が私を包んだ。それはとても暖かく、柔らかく、心地良かった。

その夜吉野は、電話で言った時間にやって来て二人で食事をし、最近忘れかけていた普通の時間の流れを二人で楽しみ、彼は夜遅くに帰って行った。

やはり、吉野は私にとって、大切な現実との接点なのだ。

「めぐみさん。元気になりましたね」出張から帰った正巳が私の顔を見て一番初めに言った言葉だ。

「そうでしょう？もう完璧よ」私は彼の前にコーヒーを置いて言う。

「良かった」正巳が笑って見せた。

「あなた、おなかすいてるんじゃないの？」私が尋ねると、彼は大きく頷いて見せた。

「スパゲッティでも、作りましょうか？」

正巳は私の顔を見ながら言う。「お願いします」

「大丈夫よ。私イタリアンには自信があるの」

正巳が笑って見せる。「僕の不安が伝わりましたか？」

「はい。ちゃんと顔に『まずいのは嫌だ』って書いてあったわ」

私はそう言ってキッチンに立つ。彼はそんな私の後ろ姿に向かって言う。

「この前いただいたカレーも美味しかったし、イタリアンも自信ありって言う事は、めぐみさんって案外料理もしてたんですね」

「すみませんね。不良主婦してたから、そう思われても仕方ないか・・・。でも、私、家の事って結構好きだったのよ。掃除も洗濯も、お料理もね。家に居る時はちゃんと楽しみながらやったの」大きな鍋にお湯を沸かしながら言う。

「へーっ、信じられないな」大きな声で彼が言った。

「あなたねえ・・・。あなたの分だけ思いっきり唐辛子を入れて置くわよ！」笑いながら言う。

「辛いのは苦手じゃないけど、適度の量にしておいて下さい。せっかく食べるのなら、旨い方が
良い」

「それはそうね」

若い彼の為に普通の倍の量、それと自分の分でおよそ三人分のスパゲッティを作ったにも関わ
らず、私が半人前程食べただけで残りを全部彼が平らげた。

「なかなか旨かったですよ。またお願いしますね」口の周りを拭きながら言った。

「ええ、良いわよ、こんなもので良ければいつでもお申し付け下さいな」私は笑いながらそう言
って食べ終わった食器を片付けた。

片付けを終えて、正巳の為に、グラスに氷とウイスキーを注ぐ。そして心の中で春樹に尋ねる
。

『あなた、今日はどっちに降りた方が良いの？』

『酒を飲みたいのは山々だけど、今日は姉さんの方が良さそうだ』

『だったら、飲まないでね』私は念を押す。知らず知らずのうちに沢山飲まれたんじゃたまった
ものじゃない。

『仕方ないな。酒の匂いのする水でも作っておいてくれ』春樹がそう言った。

私は薄い水割りを自分の為に用意して、正巳の分にもミネラルウォーターを少し入れて、二つ
のグラスを持ちリビングに戻る。

「どうぞ。今日は春樹が私の方が良いって言うから、ロックじゃなしに水割りにしたわよ」

「ありがとうございます」正巳がそう言ってそれを受け取った。

私もグラスを持って彼の前に座る。

「どうだ、何か判ったか？」春樹の意志が正巳に尋ねた。

「はい、大神（みわ）の神についていくつか調べました。先日教えて貰ったニギハヤヒです」

「ああ、それでどうだった？」

「あの時に梶さんが言われたように、ものすごい数の名前で各地に祀られています。意図的にそ
うしたとしか思えないような数でした」

「そうだろう。そうする事によって力を分散して封じてある」

「それを全部集めないと復活出来ないんですって……。一つでも欠けると駄目だってフツシ
が言ってたわ」私が言った。

「それは、多分不可能です」正巳が言った。

「どうして？」私が問う。

「それだけ丹念に分解してあるんですよ。それと、時間が経ち過ぎていて、伝承された名前自体
が風化しています。名前と神が一致していなかったり、入れ替わっていたり、そこに架空のもの
が挿入されていたり、どうにも収拾がつかない状態です。ただ、この国に存在している神社のほ
とんどに彼は何らかの名前で祀られてはいるようですが……」

「そうだな。前にも言ったように名前の呪術は使えない。しかし、奴は復活を望んでいるんだ。
それに救いがある」春樹が言った。

「確かに、フツシもそれを望んでいたし、ニギハヤヒもそうだったみたいね」私が言う。

「でも、名前の呪術が使えないのにどうするんですか？」正巳が尋ねた。

「そうだな・・・。それが一番の問題だ」春樹が言う。

「あなた達が身につけた術で何とか成らないの？」私が言う。

「姉さん、俺が何故名前の呪術を使っていたか分かるか？」春樹が尋ねた。

「一番簡単だったからでしょう？」私が答える。

「一番強力だからだ。それ以上のものが無かった。そして、すべての術の根本がそれだったからだ」

「と言う事は、それが使えないって言う事は、それ以上の術なんて無いって事なの？」

「そうだ」春樹が残念そうに答えた。

「でも、梶さんはまだ救いが有るって・・・」正巳が言った。

「ああ、確かに有る事は有る・・・」

「言いにくそうね。それってかなり危険な事なのね」私が彼の不安を感じ取って言う。

「僕なら平気ですよ。やってしまわないと先に進めない訳ですし・・・。それにめぐみさんには梶さんがついてるから大丈夫でしょう？」正巳が言った。

「五十嵐、お前は何か大きな勘違いをしているようだ。俺は姉さんに対して何も出来ないんだ。導く事も、守る事すら・・・。それは生きていた時もそうだった・・・」

「人は人には関われないのよ」私が正巳に言う。

「でも、僕達はこうして関わりあっているじゃないですか？お互いに助け合って、守り合って生きているんです」正巳が胸を張ってそう言った。

私はそれを見てとても嬉しかった。涙が溢れるのを感じて、思わず窓の方に目をやって彼から目を逸らす。

『春樹、正巳がとても暖かい心を手に入れたみたいね』

『そうだな。俺に出来なかった事を、姉さんがやってくれた』春樹が答える。

『あなたが居てくれたからよ。ありがとう』

「めぐみさん。ちゃんと言葉にして言って下さい。僕だけのけ者は嫌ですよ」正巳が言う。

「今の・・・、理解出来た？」

「いいえ。梶さんとめぐみさんのプライベートには入り込めないんです。でも、何か語り合っただけの事は判りましたよ」

「そう、あなたの悪口を言ってたのよ」私はそう言って笑って見せた。

「やっぱりそうですか。でも、構いませんよ。いくらでも言って下さい。僕はこのままで居るしか無いし、このままで居るから僕で居られるんですから・・・」

「よし。それで良い」春樹が力強くそう言って正巳の頭を掴んだ。

「梶さん。僕、もう子供じゃないです」正巳が口を尖らせてそう言った。

私は笑いながら言う。「そうされて、どんな感じがした？」

正巳も笑って言う。「僕もめぐみさんと同じ事を言いましたね」

春樹の心地良い感情が私に満ちた。そして、それが一瞬にして引き締まったものに変化して春樹が口を開く。

「姉さんに、神を降ろす。方法はそれだけだ」

正巳の顔も一瞬にして引き締まった。

「私に神を降ろすって？私の神を降ろすの？」私が尋ねる。

「いや、ニギハヤヒを降ろす」春樹が答えた。

「それは、危険です。あまりにも危険すぎる・・・」正巳が声を荒げて言った。

「そうだ。けれど、それしか無い」春樹がそう断定した。

「梶さん。めぐみさんは何も修行をしていないんでしょう？今からするとしても三年はかかる。それに、めぐみさんに修行が耐えられるとは思えません」

「修行している時間など無い。このままの姉さんで降ろす。いや、多分相手は勝手に降りて来るだろう。奴は姉さんが事代主だと知っている」

「でも、事代主は神を降ろす人です。ニギハヤヒは純粹なるエネルギー体としての神じゃない」正巳が言う。

「しかし、自分を神として祀られたいと思っているんだ。そして、奴は、確かに封じ込められた神」

「めぐみさんにニギハヤヒを降ろして、それが一体化してしまったら・・・」正巳が恐怖に引きつった顔でそう言った。

「そうだ。最強の悪霊。いや、荒ぶる神だ。そしておまけに俺もついて居る」

「そんな・・・」正巳はその後を続けられなかった。

「春樹、構わないわよ。私は生きて愛する事を選んだの。きっと戻って来るから。この前の時みたいに、そのまま良いって思ったりしない。きっとあなたも連れて戻って来てみせるから」

「めぐみさん、そんな簡単なもんじゃないんですよ」正巳が諭すように言った。

「ねえ、あなた、神を降ろした事有る？」私が正巳に問う。

「いいえ、僕には出来ません」正巳が答えた。

「私は有るの。何度も・・・。その為に一生を送った事も在る。多分、いくらかでもそれが役に立つのよ。その為に、ここ暫くその事を思い出しているんだと思う」

「でも、エネルギー体としての神じゃないんですよ。祟り神、人の嫌なものが固まって、それが神にまで育ってしまったものを降ろすんです。四国で僕が悪霊に憑かれた時の事を思い出してみてください。あんなもの、祟り神と比べたら赤ん坊みたいなものなんですよ」

「確かに、辛そうだったわよね。でも、怨念でも在る方が良いかも知れないわよ。何も無いものを降ろすのって本当に恐ろしいんだから・・・」

「そうかも知れませんが。でも、何も無い恐怖は精神や魂のものです。けれど、怨念は肉体的に蝕みます。めぐみさんはあの苦痛に耐えられない・・・」

「そうか、そんなものなんだ・・・。でも、それしか方法が無いんでしょう？」

「本当にそれだけなんですか？」正巳が春樹に問いかけた。

「ああ。残念ながら・・・」春樹が答えた。

「僕が降ろす事は出来ないんですか？僕なら、苦痛にたえられる。それにめぐみさんがいれば、どんな恐怖でも耐えられる・・・」

「無理だな。お前にそれは出来ない。降ろす前にお前は肉体ごと消滅してしまうだろう。エネルギー量とその器の大きさが違うんだ。お前のエネルギーの場の中で俺が存在出来ないのを知っているだろう？お前の中に一緒にいられるように成ったのも、傍に姉さんが居るからなんだ。俺は姉さんのエネルギーで存在している。そして、そのエネルギーでお前の中に共に居られるだけなんだ。それだけでも、姉さんのエネルギーがどんなものか判るだろう？」

「僕じゃ駄目なんですね・・・」正巳が肩を落としてそう言った。

「あなたにはあなたにしか出来ない仕事があるのよ」私はそう言う。

「姉さんのエネルギーはダイレクトにエネルギー体としての神と繋がって居るんだ。だから尽きる事が無い。そのせいでそれを受け入れ、貯蔵する事が出来るような形になっている。つまり、

特殊な形の器を持っているって言う事だ。それは正確には、大小の問題ではなく、物理的法則に従っていない」

「それはそうよ。神のエネルギーは、この世界の物理的法則に縛られていないもの。でも、そんなに自分が特殊だったなんて、初めて知ったわ」私は本当に驚いていた。

「めぐみさん。そんな事に感心している場合じゃないですよ」正巳が呆れたように言った。

「でも、先の事を恐れていても仕方ないって言う事も知ってるの。だって、一昨日春樹が私と再会したのを後悔する程恐れていたのよ。大笑いしちゃったけど、でも、それだけで私は良くなって思えちゃった。誰かが恐れていてくれるんだったら、私は恐れなくて良いの。大体いつもそんなものよ。だから四国でだって、あなたが恐れていたから私は平気だったでしょう？」

「めぐみさん・・・」

「さあ、春樹。私は次にどうすれば良いのかしら？」

「姉さん。本当にそれで良いんだな」

「ええ、それで良いわ。だから次に進みましょう」

「判った。五十嵐もそれで納得するか？」

正巳は暫く目を閉じて考えていた。そして、目を開けて答えた。

「判りました。僕は必ずめぐみさんを守ります。たとえそれがめぐみさんを殺す事になっても・・・」

「そうね。あなたが龍使いの立場に立つのね・・・」

つまり、私が祟り神と一体化した時、怨念が私を動かし始める前に命を断つ事が最後の手段だ。そこで殺し損ねたら、強力な祟り神が命を持ってしまう。眷属として、春樹まで持ったまま・・・。それだけは何とか避けなければ成らない。

私は生きて戻る事を心に沈める。私として戻るのだ。

「五十嵐、姉さんは俺が殺す。だから、その時には俺を呼べ。強く、力いっぱい俺を求めるんだ。そうすれば一度だけ、お前自身で俺を降ろす事が出来るだろう。その代わり、それが終わった時、お前はすべての記憶を失う。愛した記憶も愛された記憶も失う。その体のままもう一度生まれ直してやり直せる」

「僕がめぐみさんを殺そうとしたら？」

「俺が眷属としてお前と戦う事に成る。俺はお前と戦いたくは無い」

「正巳、私、春樹に殺されたいの。春樹があなたを殺すのも見たくない。あなたが春樹を持ったままの私を殺してくれたとしても、人殺しの記憶を持ったまま生きて行かなきゃ成らないのよ。そんなの辛すぎるわ。だから必ず春樹を呼んで、春樹に私を殺させて。それに今持っている力を失ったとしても、すべてを忘れて一からやり直せる方があなたにとって幸せだと思うわ」

「嫌だ、僕は、梶さんもめぐみさんも忘れてしまうなんて・・・」

「でも、私は春樹に殺して貰いたい。それよりも私はちゃんと戻って来るって。心配しないで」私が言う。

「そうだ。姉さんはちゃんとやれる。だから、お前は、お前の出来る事をしっかりやってくれ。それにすべてを忘れてしまったところで、俺のように死んでしまえば、また何もかもを知る事が出来る。どっちにしても恐れる事なんて無いさ」春樹が言った。

「恐れる事は無い・・・。でも、梶さんも恐れていたってめぐみさんが・・・」

「そうね。春樹もかわいいところがあるのよ」私はそう言って笑って見せる。

「姉さんから見れば誰でも大抵可愛いだろうよ」春樹もそう言って笑って見せた。

「ねえ、春樹、次に行動を起こすのは何時？」私が尋ねる。

「早い方が良いだろう。今も奴は此処を伺ってる。姉さんの力が戻るのを奴も待っていたんだ」

「凄い。私ってモテモテ！」

「めぐみさん。冗談言ってる場合じゃないです」正巳がまじめな顔で窘めた。

「明日、二人でまず大神へ行け。そして、必要があれば、葛城だ。五十嵐はどう思う？」

「それで良いと思います。大神は、大物主の本拠地ですから」

「それに、大神の神は蛇体よ。つまり龍神だわ」私が言う。

「そうだな。龍なら姉さんの仲間だ」

「変な仲間が出来ちゃったものね」

「それより、今夜は五十嵐を泊めてやってくれないか？」

「僕、帰りますよ」正巳が言った。

「いや、仕事だ。姉さんを一人にするのは危険なんだ」

「危険って？」私が尋ねる。

「さっきも言ったように奴が狙ってる。五十嵐には判るだろう？」

正巳は静かに目を閉じて、神経を研ぎ澄ます。

「判りました。確かに、何かの気配を感じます。でも、僕にはそんなに強いとは思えない」

「まだまだ修行がたらんな。恐ろしいものを見逃すのは危険だと言っただろう？ちゃんといつも感じている」春樹は少し強い口調でそう言った。

「判りました。気をつけます」正巳が素直にそう言った。

「今夜はお前が姉さんを守れ。俺はまだもう少し調べたい事がある」

「春樹、また私の奥に潜り込むつもりなの？」

「ああ、だから今夜の姉さんは無防備だ。ゆっくり眠ってくれ。それでないと潜り込みにくいんだ」

「判ったわ」私が頷く。

「どう言う事ですか？」正巳が尋ねる。

「姉さんの奥底に潜り込んで、生物的記憶に組み込まれたデータを読み取るんだ。その為には姉さんの表層意識を止める必要がある。つまり、眠ってもらうのが一番なんだ」

「それで、めぐみさんの回復があんなに遅かったんですか？僕は何度電話してもめぐみさんが戻らないからすごく心配していたんですよ」

「そうだ。姉さんのエネルギーを使って、姉さんの記憶に潜り込んだ。それで、肉体の回復を意図的に遅らせて、眠りやすいようにコントロールしていた」

「勝手な奴・・・」私が言う。

「すまない。でも、今夜は姉さんのエネルギーが戻った状態で、深い眠りに入ってもらうんだ。だから五十嵐に守ってもらいたい」

「判りました。結界を張ります」

「それも良いが、姉さんを守るには愛が一番だ。お前がいつも姉さんから愛のエネルギーを貰っていたように、お前が姉さんに愛のエネルギーを送り続けていてくれ」

私は正巳の顔を見て笑う。「正巳に私が愛せるのかしら？正巳は可愛い六歳の少年で、抱き締めやすいけど、私はこの年のおばさんだから」

「めぐみさん、あなたは大切な時に何故いつもそうやってふざけるんですか？」正巳が言う。

「そうかしら？だったらきっと怖いからよ。でも、私ふざけてるつもりは無いんだけど」

「姉さんは元々こう言う性格なんだよ。五十嵐もいい加減に慣れろ」春樹がそう言った。

「慣れてはいますけど・・・」正巳が不満げに言う。

「だったらこのまま姉さんを受け入れるんだな」春樹が言った。

「梶さんは何故そんなにめぐみさんを愛せたんですか？」正巳が問う。

「こんな良い女が他にいるか？お前はあんまり数当たって無いから判らないかもしれないが、まずいないな。そりゃあ美人で性格が良くて気の付く女ならいくらでもいるだろう。でもな、一緒にものを楽しむと言う事の出来る女はそんなにいない。お前にだって、いつか同じ人生を楽しんでくれる女が見つかるさ」

「そう言うもんですかね」正巳が諦めたように言った。

「さあ、正巳。先にシャワーでも浴びて着替えると良いわ」私はそう言って立ち上がる。

「何か僕が着替えられそうなもの有りますか？」

「はいはい。うちは洋服の仕事をしているのよ。それに、良く泊まって行く別れた夫もいるんだから、たいていのものなら揃っているわ」そう言いながらタンスを開けて、新しい下着と洗濯してある男物のパジャマを彼の前に揃えて置く。それと、コットンセーターとサンプルで使ったこカーゴパンツもクロゼットから出す。

「確かに、便利だ」正巳は感心したようにそう言った。

「ところで正巳は明日休めるの？」

「仕方ないですよ。多分一番で電話を入れれば、何とかかなと思いますよ」

「そうね。仕方ないわね」私はそう言って、自分のグラスにウイスキーを注ぐ。

「そんなに飲んで大丈夫ですか？」正巳が心配そうに言う。

「大丈夫。ゆっくり寝るのにはこれが一番よ」私はそう言って笑って見せた。

正巳は私が言ったようにシャワーを先に使った。私はその間に片付けを済ませる。そして、正巳にコーヒーを用意する。

私も彼の後にシャワーを使って、パジャマに着替えた。

「私は自分のベッドで寝るけど、あなたはどうする？」

正巳は自分で飲んだコーヒーカップを洗いながら答える。

「僕も一緒に寝ますよ」

「好きにすると良いわ」私はそう言ってベッドに潜り込む。

暫くして、正巳が私の横に潜り込んで来る。そして、そっと私を抱き締めると言った。

「お休みなさい。愛してますよ」

私はそのまま深い井戸の底に滑り落ちるようにして、眠りに落ちた。

「五十嵐、愛すると言う事が分かってきたか？」

「はい、なんとなくですけど……。めぐみさんを見ていると、今まで付き合った彼女達にたいして持ってた様な所有欲って言うものが沸いて来ないんです。多分梶さんや吉野さんの存在があるからだと思うんですけど、それだけじゃなく、この人って決して誰も所有出来ないんだって思います。だから、僕もこの人を自分のものにしたって思わないんだと思うんです」

「でも、俺はこんな形になる事で、姉さんを手に入れた」

「梶さん、それは違うでしょう。梶さんがめぐみさんに取り込まれてしまったんですよ」

「まあな。俺はこの女と何度も何度も生まれ変わっては愛し合ってたんだ。その度毎に傷つけ合った。愛する事と、傷つける事は、同じものの表と裏だ。だから、強く愛せば愛する程、深く傷つけた。でもな、この女は俺を恨む事が一度も無かったんだ。俺は何度もこいつを殺した。殴り殺した事も、無理な体なのに子供を欲しがって、結局死なせた事もある。その上自殺に追い込んだ事さえもある。それでも俺を恨まなかった。そして、生まれ変わる度にまた、俺の愛を受け入れ、俺に傷つけられた。そんな魂なんだ」

「梶さん、何故今僕にそれを語るんですか？」

「だから、最終的にはやっぱり俺に殺させて欲しいって言う事だよ。俺は、この女を殺すために何度も何度も生まれ変わった。そして、俺が先に死ぬ事によってそれが終わると思っていたんだ。でも、結局同じだった。この女を殺す事が俺の仕事なんだ」

「判りました。そんなにこの仕事、大変なんですね……」

「多分……。でもな、この女は強いぞ。俺達の持っている力なんかとは、根本的に違う強さを持っている。だから、想像も出来ないようなエネルギーの流れを作り出す。色々調べてはみたが、勝てる要素はどこにも無かった。しかし、俺には必ず姉さんがすべてを解決してしまうって言う確信があるんだ」

「梶さんらしくないですね。そう言う不確実なものを信じる人じゃなかったのに……」

「とにかく、今回は姉さんがきっと解決してしまうだろう。俺も色々調べてみたが、俺達には何も出来ないって言う事が判っただけだった。だから、負ける事が恐ろしくも無い。それが当然の結果なんだ。それ以外の結果はあり得ない。なのに俺は姉さんが姉さんとして存在し続けると言う確信を持っている。つまり、姉さんの持つ未知数が何かをひっくりがえすと云う事だろう」

「僕には信じられない。めぐみさんはこうして抱き締めていなければすぐに壊れてしまうような脆い存在です。こんなに壊れやすく脆いものを置いて行ってしまった梶さんも信じられない……。いつも筒一杯で生きていて、それでもまだ何かを与えようとしている。そんな人を守らずに逝ってしまった梶さんが僕は許せない……」

「そうか、お前もそれなりに姉さんを愛しているんだな。判った。でも、姉さんを殺す権利だけはお前にやる訳には行かないんだ。だから、絶対に俺を呼ぶんだぞ」

「嫌ですよ。僕は必ず守ってみせます。荒ぶる神にもめぐみさんを渡さないし、梶さんにもめぐみさんを殺させはしません」

目覚めた時、私は正巳の腕の中だった。

「おはよう」私は正巳に言う。

「おはようございます。まだ夜が明けたばかりですよ」正巳が優しく笑いかけた。

「変なもの、襲って来なかった？」私が尋ねる。

「大丈夫です。ちゃんと追い返しました。でも、こんな役目は今回で懲り懲りですよ。今度は、ちゃんと抱いて寝たいです」

「それは、どうもすみませんでしたね。でも、夢も見ないような深い眠りだった。あなたが居てくれたから、安心していただけ」

「そうですか。そろそろ起きましようか？」

「あなた、少し眠った方が良くないじゃないの？私は、起きてたらきっと大丈夫よ」

「いいえ、僕なら平気です。三日ぐらいなら寝ないでも平気ですから・・・」

「凄いわね。だったら起きましよう」私はそう言って彼の腕の中から起き上がる。

私は簡単に朝食の用意をして、正巳に食べさせ、シャワーを浴びて身支度をする。

正巳もシャワーの後、仕事用のスーツではなく私の用意したカジュアルな洋服を着た。

正巳の運転する車で大神へ向かう。左手に生駒連山を見ながら高速道路を南へ走る。時間が早いのでまだ交通量も少ない。途中で高速を乗り換えて東に進み、終点で降り、一般道に入る。

「ねえ、この辺りってフルの社があるわよね」

「はい。すぐそこですよ」

「寄ってくれない。私、ちょっとごあいさつしたいの」

「良いですよ」正巳はそう言って駐車場に車を乗り入れた。

私は車を降り、参道の前で佇む。

『誰か私を担いでくれないかしら？』心の中でそう思った。

正巳が黙って私を担ぎ上げると肩に乗せて坂道を登り始めた。

私は不安定な正巳の肩に乗り、何の恐怖も感じないまま先にある社に意識を集中させていた。

朝早いにも関わらず、沢山居る鶏達は一声も発しなかった。その鶏達は一様に私と正巳に注目していて、鳴くのを忘れていた。

正巳は力強い足取りで鳥居を潜り、坂道を登り続ける。そして、本殿の前で立ち止まった。左側が木造の古い門になっていて、それを潜ればすぐ前に拝殿がある。

私はそちらではなく、右の階段を登りたいと思った。その思いを受けて、正巳は黙ったまま階段を登る。そして、左側奥に祀られている出雲の神の鳥居の前で立ち止まった。私はその鳥居に触れる。木で出来た鳥居は、出雲で触れたあの石の鳥居とは違い、少し暖かみがあった。

正巳の肩に乗っているせいで、その鳥居は私の胸の辺りの高さにあった。きっとそれが鳥居の存在理由なのだ。肩や、梯子に乗って移動する神が、簡単に出入り出来ないように、関所としてそれは作られている。

「降ろして頂戴」私が正巳に言う。

正巳は、静かに屈み込むと私を降ろした。その時、私を担いでいたのが正巳ではなく吉野だと言う事に気づいた。しかし、私はそれに気を止めず、そのまま小さな社に参拝する。

「フルの社に座す、吾が神よ。守り給え 幸わい給え」

山全体を包む気が震えた。そして、それが私の回りに集まり、私を包み込む。

私はいつもの自分に戻って、鳥居の外で佇む正巳に笑いかける。

「お役目ご苦労様」私は階段を降りてそう言った。

正巳は首を振りながら言う。「僕、どうしちゃったんだろう？」
「なんでもないわ。ちょっと重かっただろうけど・・・」私は笑いながら言う。
「そうですか？」正巳は何も覚えていなかった。

私は正巳の手を取って、来た道に戻る。
「めぐみさん。ごあいさつは？」正巳がトンチンカンな事を言う。
「あらっ、もうすんだわよ」私は彼の手を離し、少し先に行って振り返る。
「めぐみさん！それ、どうしたんですか？」正巳には、エネルギーの場が見えるのだ。
「何？」私が首を傾げて見せる。
「まあ、良いです」正巳はそう言って私に追いついた。

私達はまた車に乗り込んで大神に向かう。
私は目を閉じて自分を包むエネルギーの波にすべてを預け、同化する。

『ねえ、春樹。とっても気持ち良いわ』
『そうだな。やっぱり姉さんに出雲は合ってるんだな』
『さっき、吉野が私を担いでくれたのよ』
『ああ、あいつの仕事だから・・・』
『そうね。それであなたが私を殺して木に吊した・・・』
『昔から決まっていたんだ』
『でも、泣いていたのがあなただった・・・。それを宥めていたのが吉野』
『そうさ。あいつは俺の兄貴だった』
『やっぱりそうだったのね。巧く出会っているものね』
『でも、俺はもう、姉さんを殺さない。あの役割は終わったんだ。今朝、五十嵐に教えられたよ。姉さんを誰にも殺させないって五十嵐が言った。俺も、姉さんを守るよ。それが出来るかどうかは関係ない事だ。ただ、俺も姉さんを守ろうとだけ思う事にしたよ』
『ありがとう。正巳がそんな事言ったの』
『ああ、巧く育てたな。負うた子に教えられってな』
『正巳は真っ当に生きているからよ。あなたみたいに不良じゃないもの』
『姉さん、ちゃんと生きて帰ってくれな。何も恐れずに、魂を愛で満たして、人として生きていてくれ。俺はそんな姉さんが大好きなんだ』
『うん。私もあなたの好きな私でいられるように頑張ってみる』
『いや、どんな姉さんでも俺は愛しているさ』
『ありがとう。だけど、私だって自分が好きでいたいから・・・』
『そうだな。やっぱり良い女だよ、姉さんは・・・』

「めぐみさん、そろそろ着きますよ」正巳が言った。
私は目を開けて首を振って言う。「良く寝た」
「騙されませんよ。梶さんと話してたんでしょ？」正巳が言う。
「あなたにはかなわないわね。春樹があなたに大切な事を教えられたって言ってたわよ」
「そうですか？僕は怒ってたんですよ。梶さんがあんまり無責任だから」
「それも春樹の春樹らしいところでしょう？それがなければ、彼らしくないじゃないの。無責任で、いい加減で、女好き。それが梶春樹って言う男よ」

「でも、めぐみさんは愛してる・・・」

「そう言う事ね」私はそう言って笑って見せた。

車は左にウインカーを出して、大きな鳥居を潜ろうとしていた。

眼前に三輪山が広がった。そして、その山を大きな龍がとぐろを巻くようにして取り囲んでいた。

「凄いわねー」私がつめ息交じりに言う。

「何がですか？」正巳が言った。

「山を龍が包み込むようにとぐろを巻いているのよ」

「僕には見えませんよ」

「変ね？何故かしら？」

正巳は黙って車を駐車場に入れた。

私は車を降りる前に彼に言う。

「正巳。あなたは五十嵐正巳よ。判ってるわよね。自分が自分である事をしっかり自覚しててね。さっきみたいに無意識に自分を放棄しちゃ駄目よ。それと怖いものを見過ごすモードも駄目」

「えっ？僕そんな事をしたんですか？」

「だから、自分の名前を心に沈めて、自分自身をしっかり生きるのよ」

「判りました」

私はそんな彼に笑いかけて車を降りた。

大きな鳥居を潜り、大きくうねった長い参道の砂利を踏み締めながら進む。シャツシャツシャツと砂利の音が響き、そのリズムでとても気分が高揚した。私の奥の方に有る何かが、その音に共鳴するようだ。私は俯いて高揚感を押さえる。そして、一足毎に響く砂利を踏む音に静かに気持を合わせた。

禊の為の橋を渡り、手水を使って階段を登る。そこには二本の石柱にしめ縄を渡しただけの鳥居、つまり、結界としての鳥居が立っている。此処も、誰かが神を封じ込めようとしているのだ。それを私は潜り、本殿に向かった。

しっかり足を踏ん張って、真っ直ぐ立ち、深く二度礼をする。そして大きく手を開き二度拍手を打つ。そして、もう一度大きく礼をした。

「大神（みわ）の社に座す 大和大物主の大神 守り給い 哀れみ給え

幸御霊 奇魂 恵み給い 幸わい給え」

私の祈りに山の龍が応えた。目を閉じ眠って居た龍が、優しげな目を開くと首をもたげる。そして、そのまま首を伸ばして私の匂いを確認するように首を寄せてきた。私はその龍の鼻の頭に触れながら、言う。「良い子ね。神様を守ってるのね」

龍は嬉しそうに私に擦り寄りながらじゃれつく。親しいものとして私は認識されたようだ。そして、しばらくそうしてじゃれて居たが、また山に戻って蹲った。

私は後ろの方で立ち尽くしていた正巳の元に寄って言う。

「どうしたの？今度もあなたには見えなかった？」

正巳は首を振って言う。「見えましたが。見えたから怖くって近寄れなかったんですよ」

「どうして？あんなに可愛い龍だったのに」

「めぐみさん。あなたはゲテモノ趣味だったんですね。それでいい加減で無責任な梶さんが好きだったんだ。その上、あんな龍まで手なづけて・・・」

「酷い言い方ね。まあ、それに対して反論はしないけど、春樹なんかよりずっと可愛い龍だったわよ。春樹と同じ扱いをすると龍が怒ると思うな」

「それより、どうです？此処は何か在りそうですか？」

「いいえ、とっても親密な感じがするだけよ。此処は、大和の出雲。誰もがその事を知っていて此処の神を祀っているから、別に何の不満も持ってないんじゃないかしら？」

「ニギハヤヒの意志は感じませんか？」

「ええ、此処には居ない。此処に居るのは大和大物主。でも、その名前も彼、ニギハヤヒの一つの名前なんだけどね・・・」

「それに満足しているって言う事ですかね」

「多分ね。此処にいる限り彼は大物主で良いんじゃないかしら？だって全然気配を感じないの。そう、あの龍に聞いてみましょう」私はそう言って先程の龍に語りかける。

『ねえ、大神の龍。此処の神はどうしてるの？』

蹲った龍は、首を上げて西南の方を見つめる。そして、私の方を向き直って悲しげな目で私に何かを語ろうとしていた。

「正巳、彼はこっちの方に何かがあるって言ってるみたいよ。なんだかとても悲しそう」

私は龍が見つめた方向を指さして言った。

「こっちの方ですか？やっぱり葛城ですね」

私はもう一度龍に語りかける。

『葛城に神が居るの？』

『神は此処に在らず。此処は神の御名のみ』龍の思考がダイレクトに伝わった。

『ありがとう』私は龍に礼を言う。

「正巳、此処には、神の名前だけしか無いって言ってる」

「そうですか・・・」正巳は少し残念そうにそう言った。

「じゃあ、葛城へ行ってみましょう」

「葛城の何処が良いと思いますか？」

「多分、一言主神社」私はそう答えた。

「それは危険です。一言主は事代主です」正巳がそう言った。

「ええ、知ってるわ。だからそこへ行くべきだと思うのよ。それと高鴨神社と、高天彦神社。その三つのどれかが出雲と繋がっているはずよ」

「何処で調べたんですか？」正巳が不思議そうにそう言った。

「俺だよ。俺が姉さんの中から引っ張り出して来たんだ」春樹がそう言った。

「梶さん、何処から行くのが一番安全だと思いますか？」

「姉さんに任せるのが一番だ。姉さんが今、一言主神社と言った限り、そこから始めれば良い」

「分かりました。めぐみさん、行きましょう」正巳はそう言って歩き始めた。

「私、随分前に、その三つとも行った事あるわよ。どれも、静かで良いところだった。ただ、高天彦神社には結界が張られていた。それを通り抜けるのがとても大変だったわ」

「出雲と繋がりがあるのを知ってたんですか？」

「行った時に感じたの。とっても親しげな感じがして、山の風景なんて出雲そのものだったわ」

「なのに、そこの結界に引っ掛かったんですか？」

「ええ、粘り着くような濃厚な気が張り巡らせてあって、それを抜けた途端にふっと軽くなって

、不思議だった」

「そうですか。でも、最初は一言主神社で良いんですね」

「ええ、多分」

私達はまた車に乗って、葛城を目指す。古い民家の並ぶ旧街道を通り抜け、連なる金剛葛城連山を正面に見て、それに向かって走った。途中から、窓から入る緑の香りを楽しみながら車の少ない農道を、走る。

正巳は慣れた運転で、細い道に車を持ち入れ、一言主神社の社殿すぐ下の駐車場に車を止めた。

「着きましたよ」正巳がそう言った時、私はほとんど意識の無い状態だった。

「めぐみさん。どうしたんですか？」正巳がもう一度私の名前を呼んだ。

「めぐみ……。私は伊藤めぐみ……。」私は口の中で自分の名前を確認する。

「そうですよ。あなたは伊藤めぐみです。そして、僕は五十嵐正巳」正巳が自分の為にも名前を確認する。

「ありがとう。助かったわ。戻れたみたい」私はそう言って彼に笑って見せる。

「良かった。さっき、めぐみさんが僕に注意してくれたのが役に立ちました」

「すべてが自分の為なのね」私は感心する。それに正巳も微笑んで頷いた。

「どうされます？危険を感じるんだったら、すぐに逃げますよ？」

「いいえ、降りるわ。前の時は平気だったし、そんなに嫌われて無かったと思うから」

「今のめぐみさんは、前の時と違ってらんですよ。少なくとも前の時は梶さんを連れていたりしなかったでしょう？」

「でも、私は私よ。だから、大丈夫。あなたは少し離れていて。私一人で行ってみるから」

「僕が守るって言ったでしょう？」

「そう、守る為に少し離れていて欲しいの。あなたの恐怖が重くなると困るから」

「分かりました。でも、気をつけて下さいよ」諦めたように正巳が言った。

私はそれに頷いて見せ、車を降りた。

境内へ続く階段の前に立ち、上を見上げる。一瞬の目眩と共に、涙があふれ出した。

何かが私を待っているのを感じた。私は目を閉じて、階段を上る。一段づつゆっくりと、石段を踏み締めながら……。

『私の足で登っているのよ』私はそう思った。

『私は人として戻って来たの。今は名前も持っている。私、伊藤めぐみって言うのよ』

私はそう思ったところで石段を登りきり、閉じたままの目を開けた。

そこには、出雲で見た楼門があった。龍の首を現していたあの美しい門だ。そして、私が実際に知っている一言主神社とは全く違う、あの出雲の社がそこに建っていた。

しかし私は、あの時のようにそこへ入ろうとはしなかった。

『私は人。自分の足で土を踏み締めて歩く事が出来る人。そして、愛されるだけでなく、愛する事も出来る人。私の神は私の中に在る』

私は心の中でそう強く思いながら、神殿の前に進み、そこで拍手を打つ。足を地面にしっかりと降ろし、土との繋がりを保ちながら体を軽くする。出雲での時の様に、舞い上がりはしなかった。地面が私をしっかりと捕まえていてくれるのだ。

『私は幾千万の言葉を持っている。数限りない言葉を使う事が出来る。ただ一言告げる為に生

を得、そして死を受け入れた神とは違う』

私はそう心に沈めてから神殿の前で祈る。

「大和葛城に座す、一言主の大神。我に依り給え。我と共に在り給え」

私の祈りに応え、山が震えた。

私は顔を上げ、一言主の姿を探す。そこには、真っ白いヒラヒラと風に靡く衣装に身を包み、黒々とした入れ墨を目の回りに施し、真っ赤な紅を差した一言主が宙を舞っていた。私の目はそれを捕らえ、自分の元に引き寄せる。

「一言主よ。我と共に在り給え」もう一度祈りの言葉を言う。

大きな衝撃が私を襲った。一言主が私の肩に乗っていた。

「一言主よ、私の内に依り給え」私はもう一度言う。

体を引き裂くような激痛が襲った。私の中に何も思いの無い大きな空洞が入り込もうとしていた。私は激痛に耐えながらそれを受け入れる。

その後その痛みを手放す。痛みは痛みとしてそこに在るのだが、それに意識を合わせるのをやめるのだ。そして、内に入って来た一言主に意識を合わせる。

「一言主よ。汝は愛された。汝を担った者達が汝を愛していた。汝は愛せるのか？汝は、愛するべきだ。幾千万の言葉を使いその身を愛で満たすのだ」

空洞の一言主に沢山の言葉が流れ込む。

「姉さん、愛してるんだ」

「めぐみ、僕は本当の君を愛したい」

「めぐみさん、僕が守ります」

沢山の愛の言葉がその空洞を満たしていった。そして、涙が溢れ出す。

「吾ハ タレソ」

「汝ハ 大和葛城ニ坐ス 一言主ノ神」

「吾ハ 大和葛城一言主 汝ハ？」

「吾ハ 出雲ヨリ来ル 事代主」

「事代主ノ大神 御言葉ヲ告ゲ給エ」

「我ハ此处ニ在リ スベテハ我ノ中ニ在リ」

「真ノ神ヨ」

「汝ハ吾ナリ 吾ハ汝ナリ 吾ハ伊藤めぐみ 汝モマタ伊藤めぐみ」

「吾ハ 神ゾ」

「神ハ 人ナリ 人ハ 神ナリ」

私の中から痛みが和らいで行った。空洞の中に私を形作っているものが流れ込む。そして、それは溶け込むように一体化していった。

私はもう一度拍手を打ち、静かに礼拝した。そして、内に一言主を宿したまま社殿前を離れる。

正巳は心配そうな顔で少し離れた所から、私を見守っていた。

私は静かに頷いて見せた。

ゆっくりと正巳が近寄って来て言った。「めぐみさん。一言主を連れていくんですか？」

「ええ、元々私自身なの。事代主は一つ言葉を降ろす度に命を捨て、また新しい体を持った。汚れた肉体を着替えるように脱ぎ捨てたのよ。そして、また新しい肉体を纏った。出雲で事代主と呼ばれていた神を降ろす職人的魂が、葛城に来て一言主と名を変えただけ。結局、私と同じ魂なのよ」

「めぐみさんは人として生まれ代わり続けたのに、なぜ一言主は此処に残っていたんでしょう？」

「神の残存記憶。今回は本人がそれを回収したって言う事ね」

「辛くないですか？」

「まだ、ちょっと痛いかな。でも、きっとすぐに慣れるわ。だって元は私なんですもの。最初はあなたが言ったようにすごく痛くて辛かったけど、でも、生きて居るって元々辛い事だから・・・。それに、春樹に言わせれば、死んでも結構辛い事は在るらしい。この程度なら良いんじゃないかしら？」

「めぐみさん、あなたって人は・・・」

「呆れた？」

「はい」彼はそう言って優しげに笑って見せた。

「次に行きましょか？」私も笑いながら言う。

車のエンジンをかけて正巳が言う。

「どっちへ行きたいですか？」

「高天彦神社よ」

「分かりました」正巳はそう言って車を発進させた。

暫く山裾を這うように続く農道を走り、右に折れ、山に向かう。細い曲がりくねった道を行くと、右手に鳥居が見えた。

正巳は参道の一番端に車を止めた。そこから鳥居まで百メートル程だ。

「めぐみさん、確かに此処には結界が張ってありますね」

「そうでしょう？」

「良く、これを歩いて突破出来たものです」

「普通の人には平気なのよ。あなたの結界も悪霊にしか機能しないって言ってたじゃない」

「それは、そうですけど、此処のはそんな生易しいものじゃないですよ。でも、何の為に張った結界なんでしょう？」

「行ってみれば分かるわ」私はそう言って車を降りる。

正巳も続いて降りて言う。「僕はどうしましょう？」

「あなたの力を借りたいの。今度は一緒に来てくれる？」

「分かりました」正巳はそう言って車のロックをかけた。

二人で並んで参道を歩く。体がとんでも無く重い。

「あなた、大丈夫？」正巳に声をかける。

正巳は口の中でもごもごと何か呪文を唱えていた。そして、それが一区切りしたところで答える。

「ええ、大丈夫ですよ。僕は五十嵐正巳です」

「はい。それで結構よ」私はそう言って笑う。

「めぐみさんは？」正巳が私の肩に腕を回して言う。

「私は、伊藤めぐみです」私も彼に習ってそう言う。

「OKですね。それにしても、此処の気は歪んでますね。これは、結界と言うものじゃないかもしれない」

「そうね。これは、空間の振れがあふれ出しているんだわ。前に来た時、どうしても気になった事があったんだけど・・・」

「何ですか？」

「鳥居を潜ればわかるわ。その為にあなたに来てもらったの」

私達は何とか参道と歩ききり、鳥居の前に立っていた。

「正巳、行くわよ」私は彼に声をかけて鳥居を潜る。そして、静かに目を閉じた。

思ったように、実際とは違う風景が広がっていた。確かに、社殿は同じものだ。しかし、社殿の横から後ろに向かって大きな道がついていた。実際には、後ろは山なので、そんな事はあり得ない。

「めぐみさん。此処、変ですよ」正巳が言った。

「ええ、此処は違う空間への入り口。それで、その歪みがさっきの参道まであふれ出ていたのよ」

「めぐみさんにはどう見えていますか？」

「道があるの。前に来た時にも、それを感じて変だなって思ったたのよ。でも、今は目を閉じていればちゃんと見えるわ」

「それでどうするつもりなんです？まさか入ってみるって言ったりしないですよ」

「行くわよ。当たり前でしょう。道が有るのに見過ごす訳には行かないわ」

「めぐみさん。危険です。それはあまりにも無謀だ」

「あなた、山に入る時の呪文を知っていたでしょう？あれ、やってくれない？」

「そんなの効きませんよ。此処はだだの山じゃない。それにここの道はどこに繋がっているかもわからないんですよ」

「気休めよ。とにかく行かなきゃならないんだから、何もしないよりましでしょう？」

「梶さん、何とか言って下さいよ」

「駄目よ。春樹は来ないわ。今二つに分離するだけの力が残っていないのよ」

「めぐみさん、それを知って、まだやるんですか？」

「ええ、もちろんよ。分離は出来ないけど、一緒にいるのは分かっているもの。大丈夫、彼はちゃんと私に愛を送ってくれてる」

「わかりましたよ。やりますよ。僕だって梶さんに負ける訳には行かないんですから」

「あなた達、いつからそんなに張り合うようになったの？」

「三角関係、いや、四角かな？とにかく、そう言う面倒な関係ですから」

「あなたにも冗談を言うゆとりが出てきたのね」

「めぐみさんに合わせたんですよ。梶さんが慣れろって言ったから」

「やっぱり春樹には一目置くんだ」

「めぐみさん！ちょっと黙っててください。今日は供え物も何も無いんですから、気持ちを落ち着けるのに時間がかかります」

「わかりました。すぐ怒るんだから・・・。じゃあ、私はそこの椅子に腰掛けて待ってるから、お願いね」

私はそう言って、参拝者用に据えられた壊れかけの椅子に腰掛ける。

正巳は何度も大きく息をし、呼吸を整える。彼の回りを不思議な色のエネルギーが包む。私はそれを興味深く見ていた。正巳を取り巻くエネルギーが強くなるに従って、私を恐怖が取り巻く。何が理由なのか全く分からない恐怖。変だと思った。そして、正巳が声を発した。

「ノウマクサマンダバザラダンカン オンギャクギャク役優婆塞アランキヤソワカ 葛城に座す 役小角 我に力を貸し給え」

私は大声で叫ぶ。「正巳！やめて！」そのまま私は気を失い倒れ込んだ。

私の魂が肉体を離れていた。正巳は驚いて私の抜け殻に駆け寄る。

「めぐみさん！めぐみさん！・・・」何度も私の名前を呼んでいた。私はそれを正巳の頭上から見降ろしていた。

春樹の魂が私を迎えに来ていた。

「姉さん。久しぶりだ」

「そうね。本当のあなたと会うのは五ヶ月ぶりぐらいかしらね」

「どうした？姉さんの幻じゃ我慢出来なくなったのか？」

「相変わらずね。あなたの分身はとっても良くしてくれるわよ」

「それはそうだ。俺がそれだけ姉さんを愛しているからな」

「私、まだ死にたくなかったんだけど、どうしてこんな事になっちゃたのかしら？」

私はそれについて考える。春樹はそんな私から何かを読み取っていた。

「馬鹿だな。五十嵐の奴・・・」

「どうしたのよ」

「あの馬鹿、役行者の術を使いやがった・・・」

「あっ、そうか。私一言主を飲み込んでたんだ・・・」私は本当にうっかりしていた。

役行者はすべての葛城の神を使役し、昼夜働かせて、大きな橋を掛けようとしていた。それを自分の醜さから昼夜働くのを拒否した一言主を、怒った役行者が懲らしめたという伝説があるのだ。

葛城の神を祭る立場にいたはずの役小角が、神を使役するなどあり得ない事だが、何か、役小角と一言主の間に蟠りが生じていた事には違いない。

「姉さんはどうする？」春樹が尋ねた。

「あなたと此処に居たいのはやまやまだけど、私帰らなくっちゃ・・・。あなたの分身にも約束したし、正巳にも叱られるわ」

「そうか、それは残念だな」

「でも、私帰れるかしら？」

「ああ、なんとかしてやるよ。姉さんにはいっぱい借りが有るからな。五十嵐の事も押し付けちゃったし、旦那との事もな・・・」

「あなた、本当に春樹？なんだか死んだら別人みたいに良い人ね」

「それはどうも・・・」春樹の魂はそう言って生きて居た時と同じ顔で笑って見せた。

私はその笑顔に胸が痛くなるのを感じた。春樹の魂はそんな私をそっと引き寄せると、しっかりと抱き締めて言う。「愛してるよ。今も、これからもずっとな」そのエネルギーが私の魂に新しいバイブレーションを与えた。

「めぐみさん！」正巳の顔が目の前にあった。

「バーカ！」私は第一声そう言った。

「それはないでしょう？心配していたのに」正巳がむくれる。

「だって、本物の春樹がそう言ったのよ。一言主と役小角の事知らなかったの？」

「あっ、そうか……。すみません」正巳は本当にすまなそうな顔で謝った。

「私がいけないのよ。何も考えずにあなたに頼んだから……。でも、久しぶりに本物の春樹に抱き締めてもらった。すごいラッキーよ」そう言って笑って見せる。

「めぐみさん。それってまた死んでたって言う事でしょう？あなたもう三回目ですよ」

「そうね。でも、今度のは私の幻じゃなくって本物の春樹の魂が来てくれたのよ」

「やれやれ。本当にめぐみさんにはかなわない。でも、今度は良く自分で戻って来ましたね」

「だって、幻の春樹と約束したし、あなたに叱られるのにも懲りたから、春樹に帰るって言ったら送り返してくれたの」

「ややこしいですね。本当の梶さんと幻の梶さんではどう違うんですか？」

「ほとんど一緒なんだけど……。何か見た目がちょっと違うかな……。私の幻は多分に理想化されてるし。でも、中身はほとんど同じよ。私が知って居る事を読み取って、それを元に話す訳だから会話もほとんど同じ」

「まあ、それに関しては今度ゆっくり聞きますよ。それより、こんな状態で今日は無理ですよ。出直しましょう」

「あらっ、駄目よ。せっかく素敵なエネルギーをもらって来たのに、無駄になっちゃうでしょう？いつも言ってるじゃないの、必要の無いものなんて何も無いって。要するに、必要が有って私は本当の春樹に会いに行った。そして、特別なエネルギーをもらって戻った。つまり、それが必要なエネルギーだったからよ」

「めぐみさん……」

「何？」

「良いですよ。お付き合いします」正巳はそう言うと、私を抱き起こす。そして、自分の背に担いで言った。

「じゃあ、行きますよ」

「あなたは誰？」私が問う。

「僕は五十嵐正巳です」

「五十嵐正巳君は、此处で待っててくれれば良いのよ」

「いいえ、僕が背負って行きますよ。とにかくしっかり掴まっけていて下さい」正巳はそう言って、私を背負ったまま、本殿の前で一礼してから、その横の道に入って行った。

何の変哲もない道だった。もちろん舗装された道ではないが、しっかりと踏み固められた土の道。何も不自由の無い明るさなのだが、何処にも影は無かった。

正巳に背負われてその道を歩き続ける。振り向くと、今入って来た入り口が、遠くなって小さくなったのではなく、同じ大きさのまま薄くなっていた。

「めぐみさん。何処まで続いて居るんでしょうね」正巳が言った。

「多分、このままだと何処にも辿り着けないわよ」私が言った。

正巳が立ち止まる。「どう言う事ですか？」

「行き先をこっちが決めないといけないの。つまり、自分の行きたい場所を、こっちで設定する事によってこの道が機能するって言う事」

「めぐみさんは何処へ行きたいんですか？」

「行きたい所は出雲。でも、行かなければならないのは春日」

「どっちを求めれば良いんですか？」

「もちろん春日よ。私達はあそこの神に会わないといけないんだから」

「分かりました。でも、どうすれば設定されるんですか？」

「ねえ、そんな事私が知ってるって思う？今言った事だって私の知らない知識なのよ」

「そうですね。でも、僕達はそこへ行く必要があるんですよ。だったら辿り着けるでしょう」正巳がそう言ってまた歩き始めた。

「ねえ、正巳。重くない？」

「平気ですよ。此処に居る限り物理的法則は関係ないみたいです。ただ、背中にめぐみさんの暖かさを感じるだけで、重さは全くありません」

「面白いわね。私も何処も痛くないのよ。多分、体を外に置いて来たんでしょうね」

「体を離れるって言うのがこんな感じだったら、めぐみさんが死にたがった気持ちも分かるような気がします。そして、梶さんが飛行機に乗るのをやめなかったのも・・・」

「そうですね？だから、死は恐れるべきものじゃないのよ。でも、今回私はちゃんと戻るつもりしてるわよ」

「どうしてですか？」

「私は生きて愛する事を選んだの。春樹は死んでも愛する事を止めないけど、生きて愛する事はもう出来ないでしょう？私は生きていると言う幻も、愛そうと思ってるの」

「幻を愛するですか？」

「そうよ。私が作り出したすべてのものを愛する。それだけで良いんじゃないかしら？」

「めぐみさん、前から人が来ましたよ」正巳が急に立ち止まってそう言った。

私は彼の背中越しにその人を見る。それは私の知っている人だった。

「正巳、下ろして頂戴。フツシよ」私はそう言って彼の背中から降りるとフツシに駆け寄る。

「フツシ！」

「おお、めぐみか？お前、また死んだのか？」フツシはそう言いながらも私を抱き締めてくれた。

「死んでなんて無いわよ。今からハヤヒに会いに行くの」

「ハヤヒなら、大和だ。此処は出雲だぞ」

「そうか、出雲へ行きたいって思ったから出雲に来ちゃったわけね。じゃあ、フツシも一緒に大和へ行きましょう」

「俺は、此処から出られない」

「大丈夫よ。大和を思えば良いんだから」

「俺、大和を知らないんだ」

「判った。だったら、ハヤヒを思って。私は大和を思うから」

「そうか・・・。そんな方法があったのか。しかし、今日はこの間の奴と違うのを連れてるんだな」そう言ってフツシが正巳を見る。

「そうそう、紹介しておくわ。彼、五十嵐正巳って言うの。私の息子よ」

「そうか、お前の息子が・・・」

「正巳、この人がフツシ。須佐の王と呼ばれて居る神よ」

正巳が恐る恐る近寄って来る。そして、私の後ろに隠れながら顔だけ出してフツシに挨拶をした。

「僕、五十嵐正巳です」

フツシが笑いながら言う。「まだ子供だな」

私も笑う。「正巳、フツシは怖くないわよ」

正巳が小さな声で言う。「でも、めぐみさん、スサノオなんでしょう？」

「そうよ。でも、本当の名前はフツシ。龍使いなの」

フツシはそんな正巳を面白がって、右手を上げて龍を呼んだ。

私が見慣れた可愛い龍がすぐに姿を現した。

正巳が言う。「本当だ。めぐみさんの所に居る龍と同じだ」

「ほら、行きましょう。多分、これでハヤヒの元へ辿り着けるわ」

私は左手にフツシの手を取り、右手に正巳の手を取った。

「正巳は春日を、フツシはハヤヒを思って」

一瞬のうちに目の前に笠を伏せたような山が広がった。そして、その麓に私達は移動していた

。フツシの龍はその山に住む龍とじゃれあっていて、白木の神殿から男が出て来た。

「何事だ」大きな張りの有る声だった。

「オオトシか！」フツシが声をかける。

「チチ！」その男が走りより、フツシと抱き合った。

「チチよ、何故此処に？そして、其処に居るのは？」

「オオトシよ、お前が殺しかけた女だ」

「チチよ、俺は女を殺したりしないぞ。女は可愛がる為のものだ」

私は正巳に笑いかけて言う。「春樹そっくり」正巳はそれに首を振って見せる。

「汝が祟り神と化して、この女を殺しかけたのだ。吾は父として恥ずかしかったぞ」

「それは、申し訳ない事を」そう言って、私の前に進み出た。そして、じっくりと私をみる。

「吾が女か？」

私は笑いながら言う。

「私は人よ。伊藤めぐみって名前も持ってる。それに、ちゃんと足で地面を歩いているでしょう？」

「しかし、吾が女だ。吾が愛しき女よ」そう言って私を抱きすくめる。

「駄目ですよ。僕のめぐみさんなんだから！」正巳がそう言って私を取り戻そうと彼から引き剥がす。

「汝は？」ハヤヒが正巳を見る。

「僕は五十嵐正巳です」正巳が自分で名乗った。

「吾が息子か・・・」ハヤヒが言う。

「そうよ。あなたと私の子供。あなたが何度も生まれ変わって、その間に私と結ばれて、為した息子。あなたは一人じゃないのよ。此処に居るあなたはあなたの執着が作り出した幻にしか過ぎないの」

「オオトシよ、汝も此処で一人なのか？」

「おお、チチよ。此処には心ある者は誰もいない。ただ、龍が居るのみ」

「もう、神である事をやめなさい。神は人の中に在るのよ。人として何度も生まれ変わっているんだから、人の魂を楽しめば良いのよ。大神の神のように名のみを残して、人を楽しみなさい」私が言った。

「汝はどうした？葛城に封じられた一言主は？」

「私と一緒に。事代主の私と一体化したわ。もう、悲しくも寂しくも無い。辛い事は在るかも知れないけど、人だものそれは仕方ない。私が生きて居る時代に神は必要無いのよ。だから、あなた達が人として生きる事を求められている。誰も、神を崇め、本当に神に縋りはしないの。神はただの道具にされてしまった。そんな中で、私達の時代の人、内に神を見いだした。それが、真の神。あなた達の祀った真の神。事代主の降ろした真の神。それで良いのよ。あなた達も、もう、人としての生を楽しみ、人を愛し続ければ良いの」

「しかし、我らはもう一度祀られたい」フツシが言った。それを聞いてハヤヒも頷く。

「ならば、自分自身で祀ると良いわ。此処に名を残して、魂の旅をする。そして、私の生きた時代まで辿り着いて、自分を祀れば良い。きっとその時には自分が何をすべきなのか思い出せるわ。そうすれば、崇り神になんて成らなくて済む」

「本当に我は、吾が女に崇ったのか？」

「ええ、そうよ。あなたは私に死を与えようとした。でも、この息子がそれを止めてくれたのよ。あなた、息子に感謝した方が良いわよ」

「そうか、それはすまない事をした。しかし、吾は何も知らぬ」

「それはそうよ。あなたの執着がずっと続いて、変なものに変化したんだもの。要するに、あなたが執着さえ残して居なければそんな事には成らなかったって言うことね。フツシも同じよ。フツシも変な執着を残しちゃうと、自分からそれが離れて、崇り神になっちゃうわよ」

「おそろしや」フツシとハヤヒが顔を見合わせて言った。

彼らが生きて居た時代にはまだ、倫理観というものがしっかりしていたのだろう。今の世の中のように他人の不幸を気にかけないと言う事など無かったのだ。それに、彼らはどちらも民を守る意志を持った本物の王だった。

「さて、私は帰るわよ」

「吾が女よ。何処に帰る？」

「私の生きて居る時の中へ。そして、あなたのいずれかの生まれ変わりがあなたを祀るのを見ていてあげるわ。その時にはまた、会いましょう」

「我らはどうすれば良い？」

「あなた達が祀られて居る名前になってしまえば良いのよ。そうすれば、あなた達は祀られ続けている。フツシはスサノオとして在れば良い。此処のハヤヒは春日の大神として祀られて居れば良いじゃない。大神のハヤヒはちゃんとそうしていたわよ。そして、あなた達がこだわっている『フツシ』と『ハヤヒ』は、自分自身で生まれ変わって祀る。判った？」

「おお。しかし、汝は此処からどうして戻るつもりだ？」フツシが言った。

「簡単よ、だって、此処は私が作り出した私の幻。だから、私が望みさえすれば戻れるのよ」

「しかし、前の時は、そうではなかったらう？」

「ええ。あの時は戻りたくなかったから……。でも、今回はちゃんと我が息子を連れて戻らないといけないの。その時にはあなた達も消滅してしまうから、今のうちに自分の名前を心に沈めておいて」

「我は、春日の大神」ハヤヒが言った。

「我は、スサノオ」フツシが言った。

「それで良いのよ。じゃあ、私の時代でまた会いましょうね」私はそう言って、正巳の手を取る。

「我は此処に在り。すべては我の中に在り。我、生の中に戻らん」

私がそう唱えた途端に、ブンと言う音のような衝撃のようなものが目の前を通り過ぎた。そして、正巳の手を取ったまま、高天彦神社の鳥居の前に立っていた。

私はそのまま座り込む。正巳がそれを見てあわてて私を支える。

「めぐみさん。ご苦労様でした」そう言いながら私の顔を覗き込んだ。

「どう致しまして。なんだか、本当に疲れたわよ。なんせ私、神様を言いくるめた訳だから・・・」

「そうみたいですね。僕は驚いて何も言えませんでしたよ。ああ言う話の展開で、本当に良かったんですか？」

「あなた、他に何か良い考えが在る？」

正巳は首を大きく振って言う。「母さんには敵いませんよ」

「私、るみさんじゃないわよ」

「知ってますよ。あなたは伊藤めぐみ。僕の大切な人です」

「あなたは？」

「僕は五十嵐正巳ですよ」

「OK それで良いわ。取り敢えず、私此処で待ってるから、車回して来てよ。もう、一歩も歩けない」

「駄目ですよ。まだ、此処で一人にする訳には行きません。僕がおぶって行きますから、一緒に車まで行きましょう」

「あなたって、本当に用心深いのね」

「小さい頃から、危険の中で育ちましたからね」

「その割には抜けてる所があったりして、可愛いのよね」

「判りましたから、僕の背中に乗って下さい」彼は私の前に屈み込んでそう言った。

「嫌よ。そんなみっともない事するぐらいだったら、自分で歩くわ」

私はそう言って立ち上がった。

「歩けるんだったら、初めからそう言って下さいよ」正巳はそう言いながらも、そっと私の腰を支えてくれた。

「めぐみさん、準備OKです」

葛城から戻って、三日目の土曜日。夜明けの時間に合わせて、私と正巳は奈良奥山に居た。私は白い洋服に身を包んで、其処に居た。古代の衣装ではないが、白と言う色に意味があると言う事で、純白のワンピースを買った。正巳も白の修験者の衣装を身に纏い白い鉢巻きをしている。

白木の台に様々な供え物を乗せ、最後に足元に白い布を敷き詰めたところで正巳がそう言った。

私は履き物を脱ぎ、白い敷物の上に乗る。足の裏に麻のシャリとした感触を感じた。

「めぐみさんは何も考えないで良いですよ。なるべく無になって居て貰えれば、後は僕がやりますから」正巳が静かな声でそう言った。

春樹の提案で、私自身が神を降ろすのではなく、正巳に降ろして貰うことで、もしもの時に楽にお引き取り願えるようにしたのだ。

私は緊張していた。初めて依代になるのだ。しかし、正巳にとっては、慣れた仕事。私はすべてを彼に任せて、何も考えない事にした。

静かに目を閉じる。その場所は、正巳が前日に捜し出して来た特殊な場所で、エネルギーが強い場所。不要なものは何も見えなかった。真上に向かってエネルギーの柱が立っているのも、その中にいると、エネルギーのカーテンの中に座っているようなものだった。

「あはりや あそばすとまうさぬ あさくらに 春日の大神 おりませませ」

何度か拍手を打ち、九字を切り、幾つかの息吹を発した後正巳がそう言った。

「あはりや あそばすとまうさぬ あさくらに 春日の大神 おりませませ・・・」

それをもう一度繰り返す。そして三度目を聞くか聞かないうちに私の意識が一度遠のいた。しかし、私はそれを自力で手繰り寄せる。『私は伊藤めぐみ』心の中でそう思った。

「めぐみさん。駄目ですよ。抵抗したら降ろせない」正巳が咎めるように言った。

「ごめんなさい。どうしても自分であり続けようとするみたなの・・・」

「困りましたね。いつもはそれが大切なんだけど。今回は、それだと降ろせないんですよ。もう一度やり直してみますから、僕を信じて無になって下さい」

私は頷いて見せる。

「あはりや あそばすとまうさぬ あさくらに 春日の大神 おりませませ」

正巳がもう一度そう唱えた。

私はその声に意識を合わせる。しかし、自分を放棄してしまう事が出来ない。

「あはりや あそばすとまうさぬ・・・めぐみさん。やっぱり駄目ですよ」正巳が情けなさそうに言った。

「ごめんなさい。どうしよう？」私も本当に困っていた。

その時、右手の方でガサゴソと音がした。正巳は一瞬にして身構える。

「すみません。何かの神事をなさってたんですか？僕お邪魔してしまったみたいですね」

私と同じ年代ぐらいに見える男性が、供え物の置かれた台を見ながらそう言った。

「いいえ、大丈夫ですよ。どうせ巧く行かなかったところですから・・・」正巳は一瞬身構えた自分が恥ずかしかったのか、照れ笑いを見せながらそう言った。

「神降ろしですか」その男性が言った。

「はい、春日の神を降ろさないといけないのです」正巳が答える。

「ほほ一っ、それはまた何故？」

「ちょっと色々在りまして・・・」正巳が言葉を濁す。

「春日の神の名前をご存じですか？」その男性は思いがけない事を口にした。

「はい。彼はハヤヒと言います」私が横から口を出す。

「えっ？ハヤヒですか？私はニギハヤヒと聞いて居ますが・・・」

「大和のヒメを娶って、大和の勢力と和したから、ニギハヤヒと呼ばれたんですって」私がフツシに聞いた事をそのまま言った。

「そうですか。それでニギハヤヒ・・・」

「でも、父親はオオトシと呼んでましたけど」思わず私が口を滑らせる。

「めぐみさん！」正巳が慌ててそれを制した。

「あっ！」私も慌てて口に手を当てる。

「面白いお方ですね。まるで見て来たような事をおっしゃる」男性が微笑みを浮かべながらも、しかし、鋭い目で私を捕らえるとそう言った。

「まさか、見て来たりしませんよ。そんな本を読んだだけです」私は彼から目を逸らせてそうごまかした。

「めぐみさんとおっしゃいましたか。あなた、見て来ましたね。そう、本人と会って来られた・・・」

「どうしてそう思われるんですか？」正巳がその男性に質問する。

「私も、覚えて居るんですよ。あなたの事も、めぐみさんの事も・・・」そう言って彼は、その場に崩れるように座り込んだ。

私は立ち上がって彼に近づく。そうする事で、私はエネルギーのカーテンから出てしまった。

私は屈み込んで彼の顔を見る。彼は泣いていた。目を開けて見れば、普通の会ったことも無い紳士だった。しかし、目を閉じて見ると彼がハヤヒで在る事がすぐに判った。

「正巳、本人よ。あの時私が言ったように、本人が生まれ変わって此処へ来てくれたのよ」

「めぐみさん。でも梶さんがハヤヒだったんでしょう？」

「違うわよ。いや、そうって答えた方が良いのかしら？この人は、自分を祭る為に生まれて来たハヤヒ。春樹は私を愛したり殺したりする為に生まれて来ていたハヤヒ」

「一人じゃ無いんですか？」

「色んな役割が有るのよ。でも、みんな同じもの。だから、端っこを巧く掴めれば手繰り寄せて一つに繋がれる」

その男性は、うっうと声を押し殺しながら泣いていた。

「大丈夫よ。泣かないで。ちゃんと私が見ていて上げるって言ったでしょう。あなたがハヤヒと言う名前の春日の神を祀ってくれるのよね」

男性は、泣きじゃくるようにしながらも頷いた。

「正巳、私の代わりにこの人に降ろして上げて」正巳の目を見つめながらそう言う。正巳はそれに対してしっかりと頷いて見せた。

私と正巳は彼の両脇を抱えるようにして立たせると、初めに私が居たエネルギーのカーテンに覆われた場所へ連れて行く。そして、私はそこから出て、正巳の後ろに腰を下ろす。

正巳はすべてもう一度やり直す。そして、神降ろしの言葉を唱えた。

「あはりや あそばすとまうさぬ あさくらに ハヤヒ春日の大神 おりませ あはりや あそばすとまうさぬ あさくらに ハヤヒ春日の大神 おりませ あはりや あそばすとまうさぬ あさくらに ハヤヒ春日の大神 おりませ」

その男性は、見事にハヤヒを降ろした。

「我は、ハヤヒなり」そう言いながら両手を広げ大地に寝転んだ。

私と正巳は顔を見合わせて驚く。

「ねえ、こんな神様って有り？」私が言う。

「僕も、初めて見ました」

「普通神様って、もっと鷹揚に構えてて、偉そうなんじゃないの？」

「大体そうだと思いますよ。僕も、あんまり神様は降ろした事がないんで良く判らないけど」

ハヤヒと名乗った男はむっくりと起き上がり、胡座をかいて言った。

「吾が女よ。約束どおり来てくれたのだな」

「ええ、何とか巧く行ったみたいね」私が答える。

「チチは？」

「フツシはまだ蘇らないわ。彼は、『龍』の物語が進むまで出雲で待っているのよ」

「そうか」頷きながらそう言うと、目の前に供えてある、白い瓶子に入った酒を飲んだ。

「旨い」ハヤヒが言った。

「あなた、本当に神様？」私が呆れて言う。

「神か……。どうでも良いような気がして来た。お前が言ったように、この世界に神は必要無いようだ。だから、神である事に拘るのも馬鹿らしくなって来た」

「そうね。その人の記憶にそれがあったのね」

「ああ。時が流れ、人が変わった。我魂すらこれ程変わってしまったのだ。吾が女よ。我は、どうすれば良い？」

「困ったわね。私、その人の事、何も知らないのよ。出来れば、その人と相談した方が良いと思うわよ。その肉体に宿った魂の記憶を読んで、それに沿った生き方を考えるべきだと思うわ」

「そうさな。我は、長く眠り過ぎた。此処には、戦も無ければ、守るべき民も無い。我を祀る者もな……」

「そうね。でも、私は生きているわよ。自分の道をしっかり踏み締めながら。だからあなたも生きられる。あの時に言ったように、人として生きれば？」

「おう。そうするしか無さそうだ。吾が女よ。約束を果たしてくれて有り難う。そして、吾が息子よ。ハハを守ってくれ」

彼はそう言って、限りない愛情を浮かべた目で正巳を見た。

正巳は、ただ黙って大きく頷くと神を戻す呪文を唱える。

「あはりや あそばすとまうさぬ ハヤヒ春日の大神 もとつみくらに かえりませ あはりや あそばすとまうさぬ ハヤヒ春日の大神 もとつみくらに かえりませ あはりや あそばすとまうさぬ ハヤヒ春日の大神 もとつみくらに かえりませ」

神が戻ってしまった後、その男性は、少し混乱していたが、それなりに自分を取り戻した。

彼が語ったところによると、彼は、その近所に住んで居る。四十五歳のコンピューター関係の会社の社長らしい。古代史にとっても強い興味があり、その研究などもしているそうだ。その上、正巳や春樹の持っていたような力も、少しながら持っている。しかし、彼の力は少し変わっていて、普段はコンピューターを使って現れて来ると言う事だった。

私達は、その場所に座り込んで語り合い、再会を約束して別れた。

「ねえ、正巳。なんだか、面白くなって来たわね」帰りの車の中で私が言った。

「めぐみさん。でも、今回の事はこれで良かったんでしょうかね」正巳が心配そうに言う。

「大丈夫だと思うわよ。だって、成り行きに任せた結果がこれでしょう？他に何も出来なかった訳だもの。ねえ、春樹、あなたは思う？」

「俺もそれで良いと思うぜ。姉さんは本当に良くやったよ。俺が心配していたような戦いはどこにも無かった」春樹が私の口を使ってそう言った。

「戦っている限り勝てないで教えてあげたでしょ？」

「ああ、そうだったな。俺は死んでまでも、まだ戦う事しか考えられなかったんだな。恥ずかしいよ」

「梶さん。僕も同じですよ。どんな危険が待って居るのか、どんな恐怖に襲われるのかって、ずっと心配ばかりしていた。でも、めぐみさんは事も無くそれを回避して終わらせてしまいました」

「姉さんなりに、辛い思いもしたけどな。けれど、姉さんだから何とも無く見えただけだ。姉さんのやった事は、本当にクモの糸を手繰るぐらい危険な事だった。でも、お前も良くやってくれたな。お前と姉さんを繋いでおいて本当に良かったって思うよ」

「私、そんな危険な事をしたの？」私は驚いて言う。

「五十嵐、こんな姉さんだ。お前がやっぱり守ってやってくれ」春樹がそう言った。

「判ってますよ。さっき、梶さんの分身みたいなハヤヒにもそう言われました」

私は笑いながら言う。「私って、そんなに危なっかしいのかしら？変ね、私が一番まともで、一番戦いが嫌いなんだけど」

「それは、姉さんの魂が特殊な役割を持ってるからだよ。もし、姉さんがフツシの魂やハヤヒの魂にほんの少しでも疑いを持って居たら、今頃何も無くなって居ただろう。肉体も、魂も、すべてが彼らのエネルギーに吹き飛ばされて、姉さんも五十嵐もその世界から弾き飛ばされてしまうところだった。姉さんが彼らをそのまま受け入れたから、五十嵐の持っていた恐怖すら何も知らない子供だという形で相手に伝わったんだ」

「僕、本当に子供ですよ。だってスサノオに会った時、無意識にめぐみさんの後ろに隠れてましたからね。後ですごく落ち込んだんですよ・・・」

「そう言えば、可愛かったわよ、あなた。フツシも笑ってたでしょう？」

「僕、もう三十に成るんです。あまりにも情けないじゃないですか」

「五十嵐、それはそれで良いんだよ。姉さんにとってはいつまで経っても子供だ。特に、魂だけの世界ではな」

「めぐみさん。もう魂の世界に行くのはやめましょう。こっちの世界なら、僕は男として見てもらえる訳ですから」

「そうね。でも、男なんてみんな可愛いものなのよ。あなたも、春樹も、吉野も、みんな可愛いわよ」

「五十嵐、そう言う事だ。だから、甘えて居れば良いじゃないか。それに、大人だって、ドジを踏む。それを守る子供が居たって良いさ」

「そんなものですかねえ。取り敢えず今回はこれで良かったんですね」正巳が念を押すようにそう言った。

「ああ、完璧だったよ。お前が役行者の術を使ったのまでな」

私はそれを聞いて大笑いしてしまった。本物の春樹と私の幻の春樹も繋がってる。

正巳は暫く膨れて居たが、私があまりに笑い続けるのを見て、右手で肩を抱き寄せると短く口づけをした。

「危ないじゃないの！ちゃんと前を見て運転してよ！」私がそれに抗議する。

「そんなに笑うと、一緒に死にますよ」正巳はそう言って、ニッと笑って見せた。

「春樹！なんとかしてよ。この子だんだんすることまであなたに似て来たわよ」

「ああ、俺が仕込んだんだ。ずっとそばにおいてな！

「龍」の物語と「メモリー」本編の物語がリンクした中で繰り広げられる不思議な世界はいかが
でしたでしょうか？

何故「藤花」なのか・・・

「神とは」・・・

そして「人として愛するとは」・・・

それらのことをこの物語を読むことで考えていただければとてもうれしいです。

藤花薫る・・・

<http://p.booklog.jp/book/70666>

著者：naomi

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekokiri/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70666>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70666>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ